

## <研究ノート>日本におけるオランダ人墓

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究

(巻 / Volume)

35

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

218

(発行年 / Year)

1989-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006809>

日本におけるオランダ人墓

宮 永 孝

日本を最初に訪れたオランダ人については詳らかにしないが、一五八五年（天正十三年）七月三十一日サンタ・クルス号に乗って長崎にやって来たディルク・ヘリッツゾーン（Dirck Gerrits 1544-1604）が、日本を訪問した蘭人第一号であるらしい。日蘭修好の開始は、一六〇〇年四月十九日（慶長五年三月十六日）、豊後の白杵湾に漂着したロッテルダム会社（de Rotterdamse Maatschappij）から東洋に派遣された蘭船五隻のうち一隻、リーフデ号（一五〇トン）をもって嚆矢とする。同船が他の僚船四隻とともに一五九八年六月二十七日日本国を出帆し、東洋への壮途に上るうちに、暴風雨に遭い、艦隊は散り散りになり、リーフデ号だけが日本に向うことに決し、ようやく日本にたどりついた。飢えと病気により当初、百十名いた乗組員は、白杵に着いたころ二十四名にへり、日本到着後、二名ないし六名、死亡したとされている。この中に何名オランダ人がいたかについては明らかでない。

平戸にオランダ商館が設立されたのは、一六〇九年九月二〇日（慶長一四年八月二十二日）であり、平戸商館時代は、一六四一年（寛永十八年）に至る三十三年間を指す。出島商館時代は、平戸商館が廃されて長崎に移った一六四一年七月二十四日（寛永十八年六月十七日）より、幕末（安政二年）までの約二百十五年間である。

本稿は日蘭の通交が開始されてから現在に至る約三百八十年間に、日本で亡くなり、埋葬されたオランダ人（黒人・混血児を含む）について論じたものである。日本で最初に死亡した蘭人については、未だ明らかでなく、確言をばかられる。

徳川時代を通じて、日本に来航したオランダ船は、年間数隻から多い年で、十隻余にもなるが、乗組員の中には平戸・長崎に到着後、ほどなく亡くなる者も少なくなかった。また商館に勤務する者（商務員・医師・黒人等）も不慮のできごとや病いにより死亡した。不幸にして日本で亡くなった者については、若干の例外を除くと、あまり日本側

の史料に記述が見られないが、「蘭館日誌」(Japan Dagregister)を繙くと、死亡例についての記事を毎年数件から多い年で十数件、拾いあげることができる。

平戸商館が開かれて最初に死亡したオランダ人については不明である。蘭館日誌は、第八代商館長ニコラス・クレーバッケル(Nicolas Coekbakker)が平戸に着任以後の分しか現在せず、一六〇九年(慶長十四年)から一六三三年(寛永十年)までの二十四年間分は現存しないのである。平戸にイギリス人がやって来て、オランダ人と同じように商館を置いたのは、一六一一年十一月二十六日(慶長十六年十月二十五日)のことである。イギリス商館も業務日誌をつけておるので、蘭館日誌の欠落部分を多少とも埋めてくれる。

『イギリス商館長日記』(一六一七年八月五日付)によると、長崎の近くに入津したオランダ船の乗組員のうち数名は「水の欠乏のため死亡し」、残りのすべても全員、壞血病にかかっていたとのことである。死亡した乗組員の国籍については定かでないが、おそらくオランダ人であり、水葬されたものと思われる。また同商館長日記(一六二一年七月七日付)によれば、平戸に入港中のイギリス船で、ヤン・ピーテルセン]an Pietersen(英名・ジョン・ピーターソン)というオランダ人が、ジョン・ロウンというイギリス人に左胸を小刀で刺されて殺されるという事件が起り、この日、商館内で評議会が開かれたという。殺された蘭人の死亡日は記されていないが、三日後に死体を地中から掘りおこして検視したというから、死んだのは一六二一年七月四日ごろのことと思われる。なお、殺害者のジョン・ロウンは同年七月九日に絞首刑に処せられた。ヤン・ピーテルセンの埋葬地については明らかでないが、おそらく「キリスト教徒の墓地」(the Christian burial place)に葬られたものか。この墓地跡は現在確認されていないが、「ザビエル記念碑の北側の桑畑で、明治期多数の人骨が耕作のたびに出土した」とのこと、おそらくここに埋

葬されたものであろう。

一六二七年八月十二日（寛永四年六月三十一日）、台湾長官ピーテール・ノイツの秘書ヨッフム・ファン・デル・アス Jochum van der Ass が、この日平戸で亡くなった。死因は「熱病」とだけある。ノイツの供をして平戸に着いたのは八月一日（陰暦六月二十日）のことであるから、日本到着後二週間あまりで死んだことになる。埋葬地については定かでなく、「キリスト教徒の墓地」（外人墓地——オランダ商館北側の丘陵地）に埋葬されたものか。

一六三一年十二月二十九日、ピーテール・ノイツの息子ローレンス・ノイツ Laurens Nuijs が激しい下痢のため大村で死亡した。オランダ人は遺体を大村に埋葬することを願い出たが、返事を得られず、とりあえず大村の牢獄に預けた。その後の遺骸の処置については不明。

一六三八年九月二日（寛永十五年七月二十四日）付のニコラス・クークバッケル Nicolaas Coekebakker（一六三四年～三八年まで平戸商館に在勤）の日記に、

夜半過ぎに下級商務員ダニエル・レイニエルセンが当地の商館で死んだ。今日、相応の敬意を表して、会社の島に葬った。

（永積洋子訳）

とある。

平戸時代の蘭館日誌にたびたび「会社の島」（Comp. es eijlant）という語が出てくるが、この島に最初に注目し、調査を志して果たさなかつたのは、板沢武雄博士（故人）である。板沢博士は昭和十五年九月、「和蘭人の墓につい

て」と題する小論を「日蘭協会会報第二号」(のち『日蘭貿易史』と『日蘭文化交流史の研究』に転載)に発表した。蘭館日誌に「会社の島」と書かれぬときは、LocksimaをJocximaの名で出づる。が、これらは「横島」に他ならない。板沢論文に、

平戸時代の和蘭人の墓は平戸を距る一哩のJocximaにあつた。商館長Jan van Eiserakの日記一六四二年三月八日(寛永九年二月八日)彼が江戸参府の帰途この島の前を通過した条につきの如く記してある。

(原文省略——引用者)

北北東の風、船は強風に帆かけて九時平戸を距る約一哩に在るJocximaの前を通過せり、この島は会社が長くその所有地として使用したるところにして、其所に彼等の家畜を飼ひ、且つ和蘭人を埋葬せり、その墓は一箇の碧い切石及び雑多な普通の石にて固めたるものなるが、全部崩壊して平地となりたり。

とある。

このあと、「右の和蘭人の墓地が発見されるならば、日蘭関係の遺跡として平戸の商館址と並べて記念する価値あるものと思う」と述べ、「日蘭協会関係の方々の御援助により是非近き将来実地を調査したいと念願している」と抱負を語った。

板沢博士は昭和八年(一九三三年)七月、松浦伯爵の平戸邸に滞在した折、令嗣に手紙を出し、「横島」についての調査を依頼した。その回答は次にひくものである。

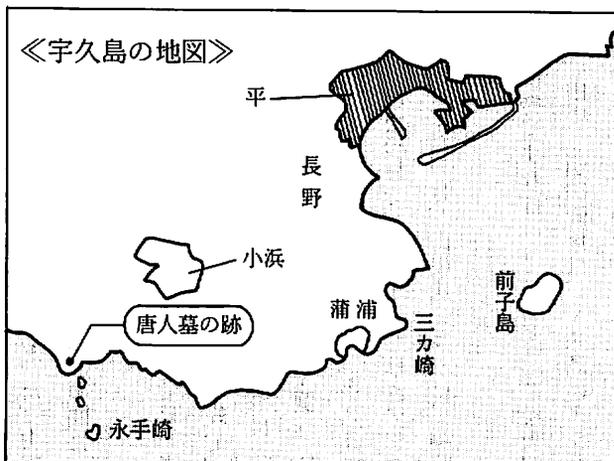
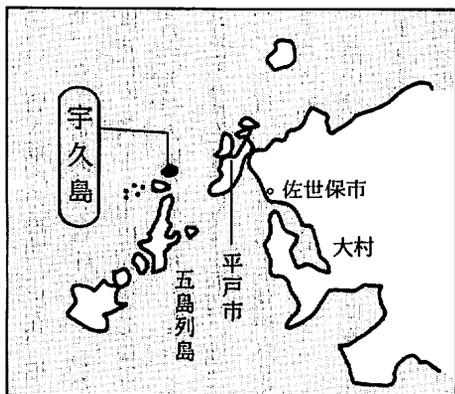
表字久島中央部海岸の出鼻小高き松原（一寸眺よき場所）に約十坪位三角形に石垣廻らし居るも、今は雜草繁茂し、只僅かに面影を忍ぶのみ、大部分は石垣崩れ、やつと墳墓と認めらる。今より数十年前迄は墓に上ると崇るとの信仰ありし由、今に里人は唐人墓と称へ子供に至る迄知られ、附近は松原並に畑である。

筆者がこの一文と初めて接したのは二十年前のことである。機会があれば、宇久島の蘭人墓地を訪ねたいと思つていたが、なかなかその機会はめぐつて来なかつた。

しかし、昭和六十二年晩秋、長崎を訪れる用事があつたので、一日同島に遊んだ。「宇久島」(北松浦郡宇久町、東西約八キロ、南北約七キロ、人口約八千)は、五島列島最北端の島である。同島に行くには、佐世保港より九州商船のフェリー・ボートに乗る。寄港地「平」まで、約二時間半の行程である。船は比較のおだやかな港内を航行しながら、徐々に沖合に向う。外海に出ると波はあらく、船の動揺が激しくなる。この日はあいにくの大時化で、一時はどうなることかと危ぶまれた。筆者は何度もおう吐を催し、生きた心地がしなかつた。……

平の埠頭で宇久町役場の住民課長田中稔と参事山田康博両氏の出迎えをうけた。町役場でくつろぎながら、両氏から板沢論文にある「約十坪位三角形」の墓地にまつわる話をお聞きした。が、宇久島にはオランダ人の言い伝えはなく、また平戸と宇久島は絶対関係はないという。郷土史家でもある山田康博氏によれば、藩政時代、宇久氏が領する五島藩と平戸藩とは交流が少なく、ましてや五島藩主の領する土地に他藩が侵して、オランダ人を埋葬するといったようなことはありえぬ、という。平戸より帆走した場合、かりに七ノツトの風があつたとすると、宇久島(古くは有

日本におけるオランダ人墓



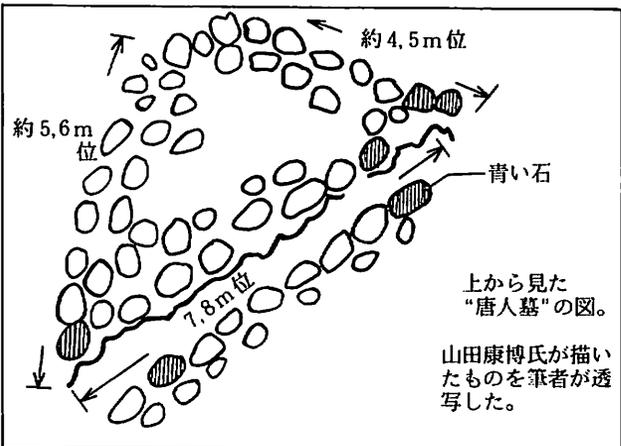
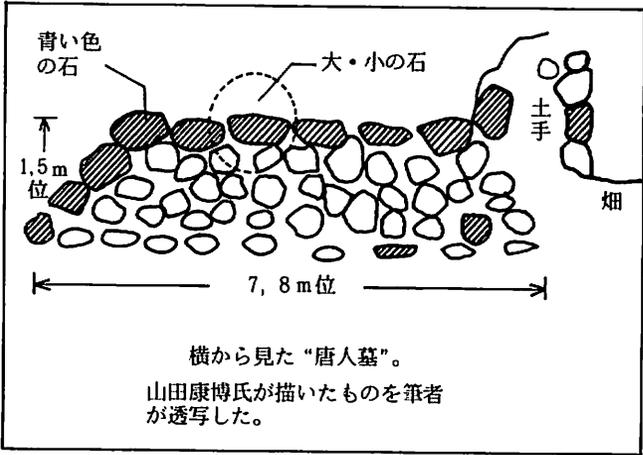
救島とも書いた)まで約二時間半ないし、三時間で行ける、とのことである。昭和十年代、夏になると、平戸からスイカ売りが宇久島にやつて来て商いをし、同島の神浦かみうらと交流があったという。

オランダ人の墓が無いのなら、「唐人墓」はあるかの間に、昔はあったが今はないとのことであった。山田氏の車でその跡地に案内された。平から約三キロほどの所、二万五千分の一の地図で見ると、下山と神浦の中間に位置し、永手崎に近い。唐人墓地の跡地は現在、畑となっている。畑のすぐそばは海である。

「唐人墓」と土地の人々から呼ばれていたものを、山田氏は昔、調査に訪れたが、そのときの記憶では「青い色の石」(花崗岩性のもの——山田氏のことば)を用いて作った高さ一、五メートル、横四、五メートル、縦七、八メートルほどの三角形の塚があったという。これは板沢論文にある記述とほぼ一致する。この石塚は「つはぶき」(学名・*Ligularia tusilaginea*——海辺の地に自生する常緑多年生草木)の中にあり、その周りはやぶで覆われていた。山田氏によれば、この塚は遣唐使時代に難波し、漂着した死骸を埋葬したものでないかという。「宇久島中央部海岸の出鼻小高き松原……」とあるくんだり、平から永手崎に至る海岸に見られた松林で、今はすべて枯れてしまつて無いという(田中稔氏談)。板沢論文にみられる唐人墓のことを松浦伯に報告したのは、山田氏によれば、神浦の住民と考えられるという。

これは筆者の推測であるが、蘭館日記にある *toexima* (オランダ語風に発音すれば「ヨックシマ」)を板沢博士は、語音類似から「ウクシマ」(宇久島)と早とちりしたのではなからうか。田中、山田両氏は、宇久島のオランダ人墓地については終始、否定的であり、唐人墓と蘭人墓を同一視できず、このことは断言できるとのことであった。

しかし、これとは別に興味をひく話を聞くことができた。宇久島の近くに「六島」(現在は小値賀町六島という。



旧平戸藩領」という小島がある。この島には昔から混血児のような者がいるという。山田氏は子供のころ、骨格や顔だちが自分たちとは違う住民をみた。

——顔は彫りが深く、面長であり、背が高く、日本人とは違った感じがしました。昔から外国人（オランダ人）の血があると聞いています。

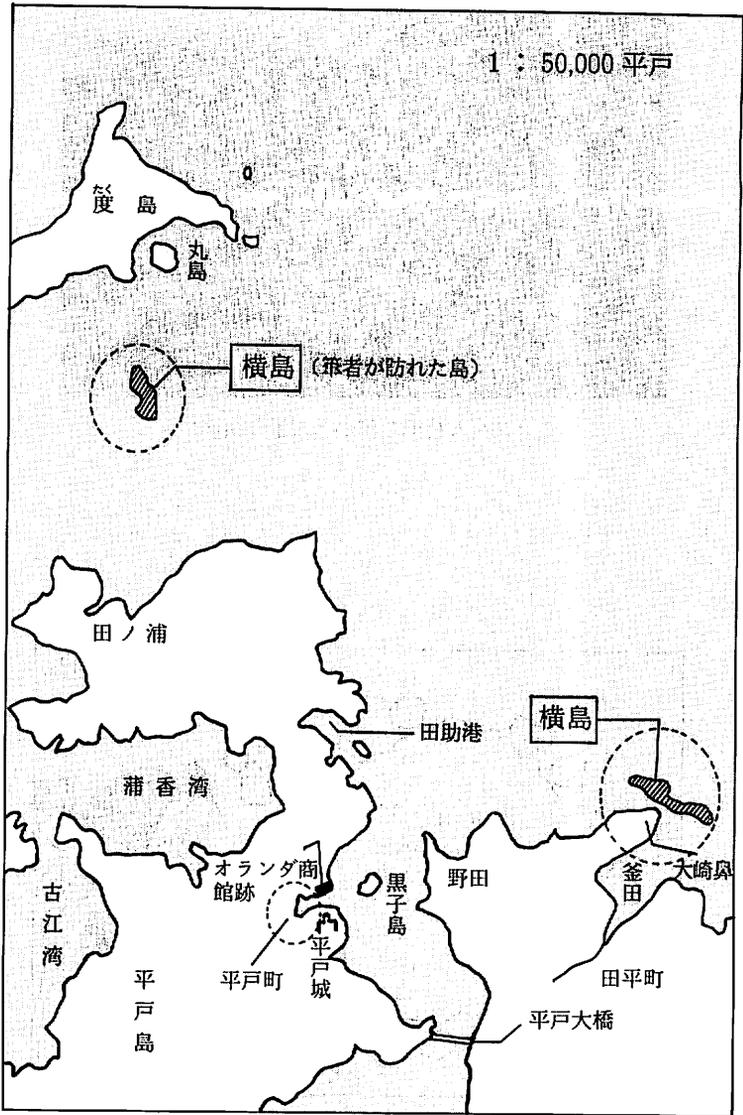
六島は湧き水も出、農耕用の牛もいて、牧舎もある。小さな入江もあって、船を着けることもできるらしい。しかし、この島は位置から観ても Jockima とは考えられないのである。

すると、既述の下級商務員ダニエル・レイニエルセンゾーン Daniel Reijniersz が葬られた「横島」とは、どこにあるのだろうか。国土地理院の五万分の一の地図で見ると、横島は二つある。度島たぐしまよりの小島と、もう一つは大崎鼻の正面に位置する島である。前者は無人島で、後者のほうは人家もみられる。

筆者は宇久島の調査が思わしくなかつたので、昭和六十三年春、横島の調査に平戸を訪れた。平戸市役所の社会教育課に勤務する郷土史家萩原博文氏と、田の浦より釣り船をチャーターして、平戸島の北端一、五キロに位置する無人島（横島）を訪れた。同島は周囲一キロほどの小島である。小さな灯台があるだけで、他にとくに目立ったものはない。平戸島寄りには、岩が切り立っている。昔はもつと大きな島であつたであろうが、波の侵食作用により、一回り小さくなったような気がする。間断なく波がいそを打ちつけている。風はやや強い。島の大部分が「はまひさかき」（学名・Fuya emarginata——つばき科、西南暖地の海岸に生じる常緑灌木）とやぶに覆われている。萩原氏によると、これは潮風に強い植物とのことである。ところどころに大地の地肌がみられる。

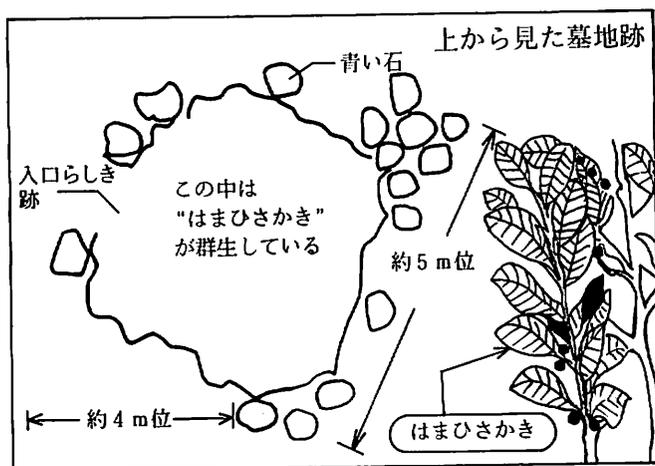
島のほぼ中央のやぶの中に、縦五メートル、横約四メートルほどの四辺形らしき、塚の跡を発見した。石の大きさ

1 : 50,000 平戸





オランダ人墓地の跡か？（筆者撮影）





日本におけるオランダ人墓

田平町寄りの「横島」(筆者撮影)

は、三〇センチ×二〇センチほどあったろうか。石垣は明らかに人為的に破壊した跡であることを示している。現在残っている石垣だけからでは、塚の形を正確に推定し得ないが、ほぼ四辺形と考えてよからう。石垣跡の中央とその周辺に「はまひさかき」が群生している。石はやや青っぽい印象を受けた。「阿翁石」(玄武岩の一種)といい、加工しやすいう。萩原氏の意見では、平戸のオランダ商館の仕切壁に使われた石(三種類あるが)と同じものとのことである。先の板沢論文に見られる、商館長ヤン・ファン・エルセラック(一六四二年、四十四年平戸に在勤)の記事にある「碧い切石」の原文は *blauwen arduyn* である。arduin = arduin は、「砂岩」とも「石灰岩」とも訳せるが、阿翁石と同じものかどうか何ともいえぬ。この石塚の付近のやぶの中に、日本人の小さな墓が、五、六基あったように記憶しているが、これらの墓は、江戸時代にコレラが流行したとき埋葬した日本人の墓標であるらしい。

元東大教授金井圓氏は、「江戸西洋事情」(新人物往来社、昭和六十三年二月刊)の中で、「会社の島——平戸の蘭人墓地」と題して、「横島」にふれているが、筆者らが訪れた島ではなく、大崎鼻の沖にある島を「まさに会社の島であったと思われる」と述べている。むろん同氏はこの島を訪れ、蘭人墓

地の有無を实地調査したわけがなく、あくまで推測の域を出ないのである。

筆者は釜田浦の北方——田平町の「横島」を訪ねなかったが、今年の夏、この島を調査した荻原博文氏の報告を次に掲げる。

先日、田平町の横島へ行ってきました。かなり大きな島で現在は無人島ですが、最近まで人が住んでおり、廃屋も残っております。

全体の印象は平戸市の横島に類似しておりますが、九州側には砂浜が形成されているようで浅くなっております。島の基盤は玄武岩ですが、平戸市横島のものとは異なり、板状のものは認められず、オランダ塀に使用した石材とは違うようですが、石垣の石材とは類似点も認められます。

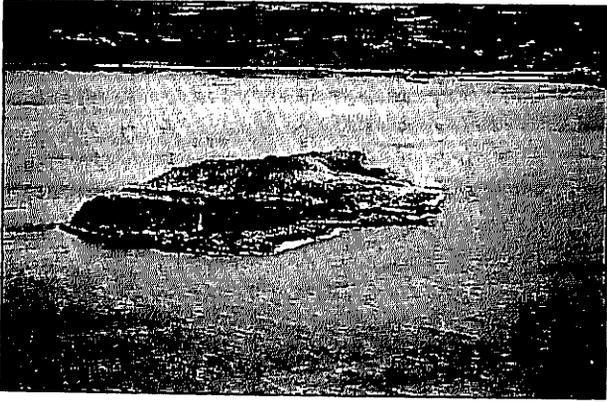
現在も島の対岸には集落が形成されており、本島も古くより対岸と一対の関係にあり、「人」も住んでいたようです。両横島を予備調査した時点では、次の点から平戸市横島を商館所有のヨコシマと考えます。

一、オランダ商館境界塀の石材は平戸市横島のものと考えられる。同様な石材が大量に検出される地点は他になく、商館所有地から運ばれたとすれば、理にかなっております。

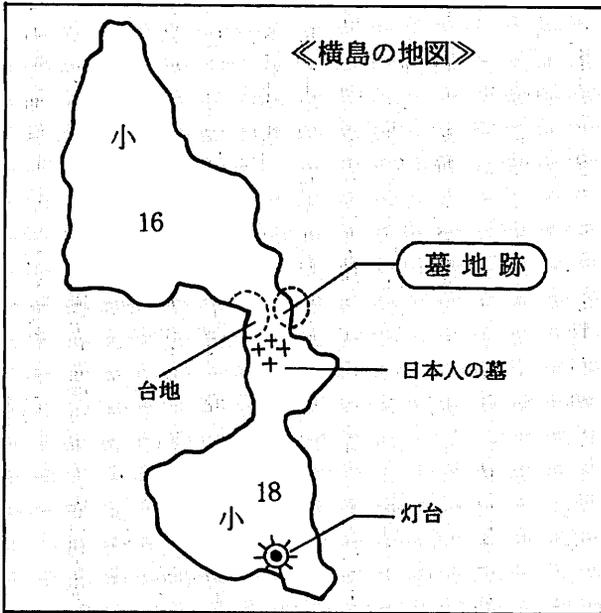
二、横島の番人の給与が他に比べて比較的高いが、これは無人島であることを考慮したのではないか。田平・横島とは対岸の集落とは百メートルとは離れていない。

三、キリシタン禁令の厳しかった時代の商館の墓地は、人里離れたほうが好ましいので、平戸・横島のほうが可能性が高い。

商館日記によると、平戸のオランダ商館は、一六二〇年代から横島を使っており、番人（日本人ソーベエ）を置き、厩舎のほか、綱索置場もあって、牧場や墓地としての役割も果たしていたことがわかる。



度島寄りの「横島」(筆者撮影)



一六四〇年一月十四日、商館の用度係手代ハンス・アンドリースゾン Hans Andriess (ハンブルク生れのドイツ人) は、去る十二月十八日 (陽曆) の夜、日本人の人妻と同衾していたところを見つかり、この日、その女とともに打首になった。遺体は仲間の手で納棺され、夕刻、会社の島に運ばれ、ていねいに葬られた。<sup>(8)</sup>

寛永十七年九月二十五日 (陽曆一六四〇年十一月八日)、この日、長崎奉行柘植平右衛門以下の随行員を従えた大目付井上筑後守は、商館の視察をおえたのち、平戸侯の屋敷に入り、時の平戸商館長フランソワ・カロン (一六三九〜四〇年まで在任) を呼び出し、蘭館の閉鎖と破壊を命じた。倉庫の破風にあったキリスト紀元の年号 (1637/1639) が幕府の忌いに触れたものらしい。翌寛永十八年六月一七日 (一六四一年七月二十四日) 商館は平戸より長崎の出島に移転した。長崎のオランダ商館は、これより幕末まで約二百年以上も続くのである。

一六四一年八月一日、平戸に入港したコーニンギーネ号の上下科 (氏名不詳) が船上で亡くなったので、会社の島に埋葬させて欲しい旨請願したが許可されなかった。日本の国土をキリスト教徒の死体だけがすことは許されぬ、というのが請願却下の理由であった。従来、許可されていた陸上埋葬が忽に不許可になったことの「原因については、時の経過を待つこととした」と蘭館日誌にあるが、八月二日に、死体に大きな石を二、三箇つけて、港外の海に葬ることを命じられた。八月二十七日、二十九日にも水夫が二名死んでいるが、「キリスト教徒の死体は地中に場所を得るに値しない」理由で、首に石をつけての海上投棄を命じられている。

一六四二年五月十日、勝手方手代 (Botteliersmaet、氏名不詳) が亡くなり、遺体は港外の海に投げ捨てられている。

蘭館が長崎に移転してからも、埋葬方法は変わらず、オランダ人は一七世紀中葉に至るまで「水葬」を強いられてい

たのである。

一六四三年九月二十六日、スウェン号の船頭 (Schipper) コルネリス・ヤンスゾーン Cornelis Jansz は、午前二時ごろ出島で亡くなったので、埋葬許可を求めたが、許されなかった。一六四九年九月十二日、船頭ヤン・ヘンドリックスゾーン Jan Hendricks が死亡したので、通詞を通して、遺体を「出島のどこかに」埋葬させて欲しいと請願したが許可されず、水葬にした。

一六四九年九月十九日、フライト船ウィッチ・ファルク (Witte Valk) 号が長崎に入港した。同船には遣日使節ペトルス・ブロックホフィウス (Petrus Blochovius) の遺体と商務員アンドリエス・フリッシュス (Andries Frisius) が乗っていた。寛永二十年 (一六四三年)、オランダ人十三名が乗った船が奥州南部に漂着、江戸に送って翌年帰国させた。漂流民の中には、砲手と外科医ら五名がいたので、この者たちを慶安二年 (一六四九年) まで八年間江戸に留め、伝習させた。使節の派遣は、漂着蘭人が世話になったことへのお礼言上と、かれらを連れ帰るためであった。しかし、使節ペトルス・ブロックホフィウスは、一六四九年八月十五日、長崎への航海中に亡くなった。C・T・ファン・アセンデルフト・ド・コニンフ著『日本滞在記』(Mijn Verbliff in Japan, 1856) によると、その死は予測されたことで、バタバアを出帆する前に棺桶を船に積んだという。小々気になるのは、同書にある次のくだりである。

遺体は日本に着いたとき、長崎の対岸稲佐山のふもとにあるオランダ人墓地に埋葬された。墓石は、まだその墓地にみられる。

(傍点筆者)

ド・コニンフがスラバヤ (Suibada—ジャワ島北東部、スラバヤ海峡の西口に位置) の停泊地よりヨアン号に搭乗し、日本に向つたのは一八五一年十二月五日のことで、年暮れに長崎に到着した。稲佐山のふもとの墓地といえは悟真寺の蘭人墓地のことだが、ここにはブロックホフィウスの墓は現存しない。ド・コニンフが同墓地を訪れたとき見た他の墓、たとえば、後述するデュールコープのものと感じ違ひしたのではなからうか。

遣日使節の来日については、『通航一覽』(巻二百四十)に、

会て日本なむぼに由<sup>註</sup>漂着せし、我<sup>註</sup>国人十人は彼地にとらはれし後、都下(江戸—引用者)にめされ、其事由を検査し、明白を得て、国王これを許し給ひ、款待浅からさりし、其恩謝の使節としてピートルブロックホフィウス君をして本国より差送り、しかるにこの人不幸にして洋中にして病死せり、是に依て例のごとく其屍は薬汁を以て殮<sup>註</sup>めて、バタバヤに載來る。

(後略)

とある。

今ひいた通りだとすると、ペトルス・ブロックホフィウスの遺体は船中で防腐処置が施された後、そのままバタバヤに持ち帰つたということになる。

一六四九年十月十八日、この日、コルネリス・クラースゾン Cornelis Claas (水夫か?) が死亡した。が「水葬にした」と商館日記にある。

このように日本で病死又は不慮の死をとげたオランダ人の死骸は、幕府のつれない処置によつて、海中に投ぜられ

ていたのである。しかし、歴代の商館長が粘りつよく陸上埋葬を許可してくれるよう請願した結果、一六五四年（承応三年）に至り、商館長ハブリエル・ハツパルト Gabriel Happort のとき、ようやく年願の許可を得たのである。「通航一覽」（巻二百五十）の「雑事」に、

承応三年午年より、阿蘭陀人毎年九月大波止に出て、諏訪神事の踊を見物す、同年自後かれ死失の時、稲佐村悟真寺境に埋葬と定めらる。

（傍点筆者）

とある。

陸上埋葬の許可が出たのは一六五四年三月二十四日のことか。この日の蘭館日誌は次のような記事を与えている。

しかし、三時ごろ、長崎の貴人たちのほか、かなりの従者を伴っているシエキング様（大目付井上筑後守のこと―引用者）とキエモン様（長崎奉行甲斐庄喜右衛門のこと―引用者）およびわれわれの監視役で両者に出仕している立派な御検使二名が来館した。われわれは死者をオランダの服装のまままで葬るよう命じられた。

Maer omtrent dry' uren verscheenen by' ons nevens Nagasakisen Edelman onsen conducteur twee aen sienelycke Bongioisen wegens Sickingo en Quiemonsamma met tamelycke gevolch en ordre om onse dooden naer de Nederlantsche costumen te begraven.

日本におけるオランダ人墓

人工の島「出島」は、狭くて小さいので、とても死者を葬る余裕がなかった。そこで幕府に適当な埋葬地を頼み、捜してもらった結果、候補に上ったのが悟真寺裏の林間の空地 (open) だったのであろう。ここで幕末までの約二百年にわたって蘭人が埋葬された悟真寺と外国人の目に映ったオランダ人墓地について述べてみよう。

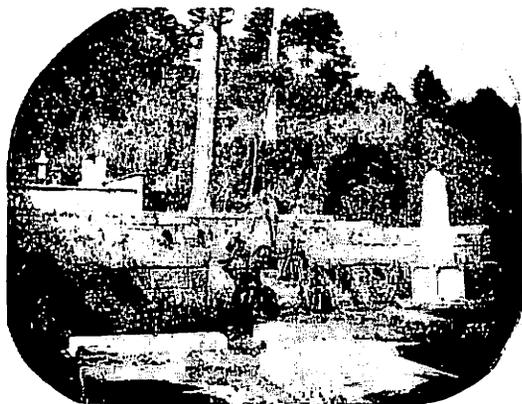
悟真寺は長崎市曙町にある浄土宗の古刹である。慶長三年（一五九八年）、筑後善導寺の僧侶——聖替玄故の創建にかかる。

聖替はキリシタン全盛時代に、邪宗門のはげしい圧迫にもめげず邪徒の教化につとめ、慶長三年本山に願い出て「悟真寺」という寺号をゆるされ、稻佐氏の居宅跡に寺院を建立した。聖替はその後、仏教の再華と信者の教導に力をつくし、慶長七年より二十九年間、長崎で暮らした。

悟真寺の本堂は文化十一年（一八一四年）に再建されたが、原爆により破壊され、昭和三十八年に再び建てなおした。同寺院の縁起と由来について述べている古記録がいくつある。たとえば『長崎名勝図絵』（巻之三）は次のようにいう。

終南山光明院悟真寺 稻佐浦にある。

浄土宗 筑後善導寺末寺。



幕末の悟真寺裏のオランダ人墓地  
(アムステルダム海事博物館蔵)



大正時代のオランダ人墓地  
(『南蛮長崎草』より)

悟真寺裏の今ある蘭人墓地は、大正七年（一九一八年）十月に修理を施したものである。東京のオランダ公使館の出資を得て、墓地の周囲に赤レンガの塀と石の門を設けた。大正時代に同墓地を撮った写真が一枚、永見徳太郎著『南蛮長崎草』（歴史図書出版）に添えられているが、それによると、墓地の周りには簡単な杭のようなものがあるだけで、塀らしきものはなく、殺風景な印象を与えている。江戸時代の墓地周辺はどうであつたかについて何ともいえないが、遠くに長崎湾の青い海が見える、木立ちの多い丘であつたかも知れない。

一八四三年十一月十二日（天保十四年九月二十一日）——この日商館長ビイテル・アルベルト・ピック Pieter Albert Bik（一八四三〜四五年まで在勤）と商務員らは、通詞・目付を同道して稲佐山に遊歩に出かけた。が、このとき「われわれの墓地」を訪ねた。当時、蘭人墓地は「荒地」（wildernis）の中にあつたと記している。

長崎にやって来た西洋人の中には、オランダ人墓地を訪れるものもいた。そのうちのある者は、帰国後、そのときの体験を綴った手記を発表した。一六九〇年出島オランダ商館付の医師として来日したエンゲルベルト・ケンペル（一六五二〜一七二六）の『日本誌』（英訳 *History of Japan 1906*）には、短いながらも十七世紀末の稲佐の蘭人墓地についての記事がみられる。

昔は、オランダ人が長崎で死ぬと、その遺体は地中に葬る価値なしと見なされ、港外の海へ投棄されたものである。しかし、このころでは稲佐山の荒涼とした空地を与えられ、オランダ人の死体をそこにちゃんと埋葬する許可も得た。その後、この墓地に日本人の番人が置かれ、十分に監視させ、埋葬後数日もすると死骸を葬った場所がわからないようにした。

稲佐の蘭人墓地に墓標設置の許可がおりたのは、墓地を与えられて三十年後の一六八四年八月（貞享元年七月）のことである。ケンペルが長崎にいた頃は、墓石を設けてもよかつたのに、あえてそうしなかつたのは、一つには幕府への遠慮と、墓所を荒されるのを懸念し、葬つた場所を発見されないようにしたからであろう。

一七七五年八月、船医として来日したスウェーデンの植物学者カルル・ピーテル・トゥンベルグの『日本紀行』（仏訳 *Voyage en Afrique et en Asie principalement au Japon 1794*）には、蘭人死亡後の埋葬手順について記されている。

ほとんど同じ頃、水夫の一人が出島の病院で亡くなつた。長崎奉行にこのことを知らせ、埋葬の許可を求めると、日本人が何人かやつて来て、死体を入念に調べ、そのあと対岸に埋葬するために、死体を棺の中に納めた。何人かの人から聞いた所では、死者を葬つたり、日本の習慣に従つて火葬するための場所が遠くに設けてあるということである。火葬については、確かな情報を得ることができなかつた。

長崎に入港する船や出島で死人が出たときには、御検使（検死のための役人）・町役人・通詞らが事実確認のためにやつて来た。『通船一覽』（巻二百五十）に、

一 阿蘭陀人相果候節は、与力一人、歩行者一人、同心一人、町使一人、通詞遣し、別条無之候得は、伊奈佐へ為埋候事とある。

一八二〇年七月、一等事務官として長崎にやって来たファン・オーフルメール・フィッセル（一八〇〇〜一八四八）は約九カ年日本に滞在し、帰国後、「日本風俗備考」(*Bydrage tot de kennis van het Japansche Rijk* 1833) を著わした。本書は豊富な資料に基づき、自分の見聞と体験とをないまぜて書いた十九世紀日本の風俗史でもあり、資料的価値も高い。とくに本稿との関わりで重要なのは、十二章「雑録」にある、オランダ人の埋葬式についての記事である。

出島を離れる前に、われわれは、オランダ人に深い関係を持っているもう一つの場所を訪問しなければならない。それは、彼らオランダ人の死者たちの眠っている場所、すなわち長崎湾の向う側にある稲佐の墓地である。この墓地は同じく稲佐という名の寺（悟真寺のことか——引用者）のそばにある。われわれはこの辺に遊びに行くこともしばしばあるが、この稲佐の地には多くの日本人の墓にまじって、オランダ語で銘を刻んだ美しい墓石・記念碑があるので、よく記憶している。われわれは友人たちの面影を偲ぶことなしに、また驚きと感動なしにこの地を訪れることはできない。

オランダ人の墓の多くは大体においてはなればなれになっていくのではなく、むしろ近くにまとまっているが、しかし日本人の墓の間にまじっているものもある。このことはむしろ日本人が見かけほどには狭量でないことを示す証拠ともなるものである。というのは、彼らはこれらの異国の人の遺物を遠く離れた場所へ移してしまうか、または、昔われわれが彼らに譲歩していたように、海中に投じてしまうことを要求することができるであろうと思われるからである。それどころか、その地に葬られた者たちの詳細は過去帳を保管しているこの寺の住職（欣譽良碩のことか、文政二年より同八年まで、聖徳寺十五代泰譽が住職をかね持つ——引用者）は、死亡した日本人に対する場所とまったく同様にして逝去したオランダ人のためにもその勤行を怠ることはないのである。

墓の前には、しばしば花や米または水が供えられているのを見かける。また墓は清潔に維持されており、そのための資金と

して年々上記の寺に対するわずかな贈物がなされている。もしもオランダ人が日本で死亡した場合には、そのオランダ人は埋葬される前に御検使によつて検死が行なわれ、そして下検使たちの立合のもとで納棺される。滞在中のヨーロッパ人たちがこれに付き添つて出島を練り歩いてから、遺体は水門すなわち長崎の町ではいわゆるモツセル・トラップ (Mosseltrap) と呼ばれている処で一隻のスループ船 (一本マストの縦帆船——引用者) の中に安置され、そして二隻以上の船がその埋葬に随行するのである。

住職は弟子の僧二人を伴つて寺の入口で遺体を受けとり、そして行列を墓地へ導くのであるが、そこには一個の小机が準備されており、その上には二個の壺が置かれ、その中には香りのよい灯心 (線香) に火がともされており、また小さな鉦 (ふせがね (仏具の一つ) ——引用者) と一緒に、二個の木皿にのせたお供え物も飾られるのである。棺は墓場の手前まで運ばれ、住職はその前、すなわち上記の小机の前に位置を占め、それから声高に読経を行うのである。若い僧たちは、時々鉦をたたき、そして最後に住職は、その手に握っている杖をもつて、「阿弥陀の神よ、彼のために祈らせ給え」という意味の南阿弥陀仏という祈りを繰り返しながら、棺の上を三度たたくのである。これをもつて儀式は終了し、住職は二瓶のアラク酒 (アラク酒ともいう。ヤシの汁から作る蒸留酒——引用者) と二個の長煙管および棺を覆っていた黒い唐縞子の覆いを受けとるのであるが、それらのものは古くからの習慣に従つて、一つ一つ彼に感謝の意をこめて贈られたのである。

(庄司三男訳)

とくにフィッセルが日本にいた文政年間のオランダ人の「野辺の送り」の様子を伝えたものが、この引用文だが、江戸時代を通じて送葬の方法はほぼ同じであつたと考えられる。

オランダ人は、公然とキリスト教の葬儀を行なうことを禁じられていたから、不幸にして同胞が亡くなつた場合、その遺骸を仏寺に持ち込み、仏式で葬むることを余儀なくされていた。<sup>(15)</sup>

オランダ国王の侍従長を勤めたヨハン・マウリッツ・リンデン伯（一八〇七〜一八六四）は、一八五五年（安政二年）に来日し、出島の蘭館に約四カ月滞在し、帰国後、『日本回想録』（仏文 *Souvenir du Japon 1860*）を著わしたが、この中に「稲佐村近傍の悟真寺」（*Le temple de Gozinzie près du village d'Irassan*）と題する小記事がある。これはフィッセルの文章と同じようにオランダ人の送葬と仏僧による回向について簡単に述べており、幕末の蘭人の弔いなどのようなものであつたかその概念を与えてくれる。

長崎湾の右岸に、稲佐という小さな村がある。この村は二世紀この方オランダ人の死者をあつく遇する特権を有していた。墓地の世話は、悟真寺というシナ寺の僧侶にまかせられていた。その僧侶は埋葬に立会い、会葬者たちに祝福を与えるのである。

埋葬は次のような手順で執り行われる。死人が出た翌日、棺が和船に運ばれ、オランダ国旗で覆われる。商館長、オランダ人職員、御検使、通詞などが、別な船に乗って後に従うのである。葬列は稲佐村へと向う。浜辺に着くと、オランダ商館の苦力たちが山の上にある悟真寺まで棺おけを運ぶ。この寺院で、商館員たちの会葬を得て、シナ僧によつて葬儀が営まれる。次いで棺は墓地へ運ばれ、墓穴の中へ降ろされる。

墓地には七、八基の墓石がある。墓地は手入れが実に行き届いており、日本人やシナ人の墓地のそばにある。埋葬が終わると、出島の商館員らは悟真寺に戻るよういわれ、そこで僧侶から茶菓子の接待をうける。商館を立つ前と棺おけにふたをする前に、日本人の役人が来て検死を行なうが、これは奉行所の措置にすぎない。

調書にあるのはこのようなものであるが、死者の墓の上で述べられた想い出やキリスト教徒としての希望の言葉は、調書の中で不問にされている。

オランダ人がようやく稲佐山のふもとに埋葬されるようになって、そこに最初に葬られた者は、カイーク船（二本マストの帆船）の縫帆手（氏名不詳）である。蘭館日誌によると、一六五四年三月二日に亡くなっている。このオランダ人こそ、蘭人墓地に葬られた第一号と思われるが、残念ながら墓は残っていない。

特筆すべきは、同年二月二十三日の夕刻、商館長ハプリエル・ハバルトの参府旅行に従った下級商務員オット・ワツケル（Otto Waker）が江戸で死んでいることである。ワツケルはすでに大坂と三島間で病氣となり、江戸到着後、病死したものである。商館員は参府旅行中、もし死ぬことがあれば、その地に葬られることになっていた。江戸で死んだ場合には、「浅草穢多村」<sup>(16)</sup>に埋葬されるよう決められてあった。

ワツケルの埋葬地に関しては、

町（江戸）を離れること約一マイルの所に運ばれ、そこ（アサースーカ寺と呼ばれる）の地中深く葬られた。

と蘭館日誌にある。埋葬されたのは、死んだ翌日の二月二十四日のことである。ここで問題なのは、「アサースーカ寺」である。原文には、*Ongeveer een myl weeghs buiten de stadt gebracht en daer (omtrent een tempel Ass-as-ca geheten) wel diep in daerde gestelt* とある。「アサースーカ寺」は、おそらく「浅草寺」のことを指すものであろう。

日本に來航したオランダ船は、一六二一年（元和七年）から一八四七年（弘化四年）までの二二七一年間に七一五隻であり、一年平均三・一隻になるとい<sup>(17)</sup>う。バタビアを出帆した蘭船の多くは、陰曆の六月から八月の間に長崎に入港

するのがふつうであった。そして三ヶ月ほど日本に滞在したのち帰航した。江戸時代を通して死者が多く出るのは蘭船の長崎入津時が最も多く、陽暦の八月から十月までの間に集中している感がある。不幸にして長崎入港後に亡くなったオランダ人の役職や身分を見ると、概して水夫が最も多く、その他見張人・舵手・砲手・用度係・おけ屋・船大工・見習水夫・縫帆手・軍曹・伍長・水夫長・らっぱ手・給仕・鼓手・船長・艦長・船医などがある。いま例挙げたものは乗船要務の者であるが、次に出島蘭館の住民の中からは、商務員・帳簿係・外科医・商館長・黒人（ジャワ人）などが亡くなっている。

これらのオランダ人は大抵の場合病死しているわけだが、死因（病名）については明らかでない。おそらく壞血病を筆頭に、熱病・疫病（コレラ・赤痢・チフス）等によって斃れたものであろう。蘭館日誌に出てくる死人は、多くの場合、氏名が記されているが、時として明記されていないこともある。悟真寺裏の蘭人墓地には、出島に在勤した「黒人」（ジャワ人・マレー人など）も葬られたが、従来、かれらについてはあまり注意を払われず、蘭館日誌にもほとんど名前は出てこない。かれらはほとんど一顧の価値なき存在として葬むられたものと思われる。江戸時代、日本人は、オランダ人のことを「紅毛人」とも呼び、黒人のことを「黒坊」と呼んでいた。森島中良（一七五四〜一八一〇、侍医桂川甫三〔くわのり國訓〕の次男）が編んだ「紅毛雑話」の中に、「黒人」についての記事をいくつか捨い出すことができる。

## ○ 黒 坊

船中連來る所の黒坊の事を「スワルトヨンゴ」と云。「スワルト」は黒き事、「ヨンゴ」は若イ者といふ事なり。生国は南海の内、咬嚙巴、榜葛刺「マレイス」「プーギス」「マロワル」等の土人なり。日に近き国に生るゝ故、色焦れて黒きなり。相對にて（二人で相談しての意——引用者）紅毛人に抱えらるゝもあれと、おほくは其国の人かどひ、幼少の兒童をかどはかして蠻人に売といへり。性あくまで愚にして、強力の者もあり。常に飯と肴を喰ふ。豕（いのしし、ぶたの類——引用者）をば決して食せず。鶏なども自ら殺して、引導をわたしたる物にあらざれば食はず。四足の内にて牛ばかりは食ふ。是は天竺地方の常食なるが故なり。文字は「マレイス」文字を似て通用す。（後略）

黒人の風貌のうち鼻柱（はなすじ）については、

## ○ 鼻 帯

黒坊が大が鼻低し。其故如何となれば、彼俗鼻のひきゝを悦ぶなり。故に幼なき時、鼻を押平め、革の紐にてきりくゝとからげ置キ、成長の上にて是を解となり。さればこそあれ彼地方の國人等、たいていひしげ（押されてつぶれたの意——引用者）鼻なりとぞ。其紐を「ノイスバンド」といふ、「ノイス」は鼻、「バンド」は帯の蛮語なり。

とくに興味を惹かれるのは、黒人の送葬の模様である。次にひくものは長崎で黒人の埋葬を實見した林子平（一七三八〜九三、江戸後期の経世家）の談話筆記である。土をあげ信仰する黒人は葬られる前に、口の中に土を一杯つ

め込まれたとある。

○ 黒坊の葬式

林子平崎陽尹(長崎の異稱——引用者)に遊事して、西洋館(がなやま)に出ツ入する頃、天竺人の葬送を見る。黒窟あたりの産棺は松板にて拵えたる臥棺なり。是も出島より稲佐山へ舟にて送る。同国の黒坊悟真寺まで見送り、惣て寺僧の手を待ず、葬穴の前にて死骸を引キ出し、赤裸にして口の内へ土をなるだけ押し込ミ、横さまに伏させおき、其身は「サロン」(蘭語 sandre 「腰巻の類」——引用者)といふ大衣の如く仕立たる木綿の単なる礼服を着し、是は僧にも替打チ敷(織物の敷物——引用者)を敷て礼拝をなし、横文字にて書たる経文(聖書のことか——引用者)を出して天竺にて今世は梵字「アレイ」読経す。其声はなほだ殊勝なり。夫より誦経をはつて後、掌を合せ、「アミン」と唱ふる事十遍、「アイノーハ」「ナイノーハ」(意味不明——引用者)と唱へながら、左右を拜する事百遍にして、屍を埋るとなり。

家兄(自分の兄のこと——引用者)の考に曰、土を口に含ませたるは故ある事なり。西洋の人、四元行(しげんぎょう)と号て水火氣土の四を尊信す。生前水を尊信する者をば、其屍を水葬し、火を尊信する者をば火葬し、氣を尊信する者をば、繩をもつて樹の枝懸に懸吊、土を尊信する者をば土葬にす。中良案に釈氏聖賢日葬法天竺有四焉。謂水葬火葬土葬林葬也。水火氣土の四葬此文と相似たり。長崎に居所の西洋人の内、水火金の三を尊信する者をも、やはり日本の制にならひてすべて土葬にすると見えたり。中にも子平が見たる所の土を押し入く含ませたるは、土を尊信する者を葬る式にてやありけん。(後略)

出島に在勤した黒人の多くは若者(少年)であり、その仕事は、オランダ人の食事の給仕、縫い物、洗たく、水くみ、台所の手伝い、その他の雑用であつた。身分は低く、商務員や医師のしもべとして奉仕した。蘭館日誌にその死亡記事が出てくるのは十八世紀に入つてからである。死亡した場合、検死を受けることはオランダ人と同じであつた。

ちなみに、黒人についての記事をいくつか紹介しておこう。

一七四〇年六月六日（元文五年五月十三日）

今日の午後、上外科フリリップ・ピイテル・ムセウルの奴僕死去せり。

*Desen na de middag is er een manslaaf van den opperchirurgyn Philip Pieter Museulus overleden.*

同年八月二十二日（元文五年七月一日）

今朝、クラベンデイク号の次席商館長アルベルトゥス・ファン・ポールの奴僕、死去せり。

*Desen Morgen is er een manslaaf van den secunde Albertus van Poort op het schip Crabbendyck komen te overlyden.*

一八〇五年五月一日（文化二年四月三日）

今日の午後、私が使つておる少年は黒鯛の卵を食べたあ



蘭館内の黒人の図（『長崎古今集覧  
名勝図絵』より）

と亡くなり、直ちにその死を奉行所に伝えた。

Des namiddags voerleed een slaave jongen van my aan de gevolgen van het eeten van de kuyt van een swarte steenbrassen waarvan ik terstond kennisga o't gouvernement.

一八〇九年九月二十二日(文化六年八月十三日)

夕方ちかく、ジャワ人一名亡くなり、そこで私は埋葬の命令を出した。

Teegen den avond overleed een Javaan waarop ik ordre stelde om die te laten begraven.

同年十一月二十一日(文化六年十一月二十五日)

またジャワ人一名死去。

Ook overleed een Javaan.

一八五五年九月七日(安政二年三月二十一日)

オランダの蒸気艦ヘデー号のジャワ人火夫バタース、死去せり。

Overlijden van den Javaanschen vuurstoker van Z. M. Stoomship Gedeh, genaamd Patraas.

また蘭館日誌には、人間の死とは別に、出島の中でオランダ人が飼っていた動物（犬・オーランウータン）の死についての記事がみられる。次に掲げるものがそれである。

一七三九年十一月三日（元文四年十月三日）

一七三四年、日本の皇帝（将軍家——引用者）に献上するために送られて来た獵犬のうち一匹は、今まで当地で生きていたのだが、今晚死んだ。

Desen nagt is er een van de jagthonden die in den jaare 1734 tot geschenk aan den Japansche Keyser gesonden dog tot nog alhier verbleven zyn komen te sterven.

つづいて八日後（十一月十一日）に更にもう一匹死んでいる。

今晚また獵犬の一匹が死んだ。

Desen nagt is er weder een van de jagthonden komen te sterven.

筆者は犬の記事を五、六件見たように思う。次にオーランウータンの死一件を紹介しておこう。

一八〇〇年九月十二日（寛政十二年七月二十四日）

また昨晚、オーランウータンが死んだ。

*Ok dat gepasseerde nagt de orangoutang gestorven was. —*

閑話休題。

来日オランダ人は平戸・長崎・江戸にかぎらず、江戸参府の往還においても亡くなる場合があった。一七六八年三月三日午前九時ごろ、商館長ヤン・クランスは簿記係ルドルフ・フレウデマン、上外科ヤン・フランソワ・ド・ハウト (Jan Francois de Haut) を伴って江戸に向い、その帰途、同行のド・ハウトは不幸にも京都近郊で亡くなった。

同人は旅行中、健康状態が思わしくなかったようである。一七六八年五月十七日（明和五年四月二日）付の「蘭館日誌」には次のようである。

五月十七日（火曜日）。

アーロン（ベルギーの町——引用者）出身の上外科ヤン・フランソワ・ド・ハウトは、参府旅行中ずっと次第に体が衰えて

行く病いに苦しんでいた者が、午前二時ごろ亡くなった。そこで直ちに遺骸を京に送った。

#### Dingsdag

17<sup>de</sup> morgens omtrent twee uren den oppermeester Jan Francois De Haut van Arlon na gedurende de geheele rhyse aan een yfsteerende siekte gelaboreert te hebben is koomen te overlyden, sende aanstonds het lyk naar Miraco voorruyt, .....

三日後の記事は次のようなものである。

五月二十日（金曜日）。

今夕、多くの難儀と熟考を経て、内裏の同意と所司代の命に従い、上記の上外科をサカ派のシンヨダ・トヨインに埋葬した。原文は次のようになっている。

#### Vrydag

20<sup>de</sup> Heeden deesen avond naar veele moeylykheeden en eneyndige raadpleeginge met toestemming van den Dayri en volgens ordre van den heer grootregten den gemelde oppermeester begraven by den tempel Sinjoda Tojoten van de Sacas gesinte.—

「シンヨダ・トヨイン」とは、現在の京都市左京区浄土寺真如町にある「真如堂東陽院」のことである。紅毛外科医が王城の地に葬られるということとはよくよくの事であったと思われる。ド・ハウトの病死については『通航一覽』

(卷二百四十一)に、

明和五戊子年、当春江戸参上之外科紅毛人、四月三日於京都病死、同五日真如堂中東陽院に埋葬之、長崎志、

とある。が、オランダ側の記録と一日のずれがある。

筆者は、ド・ハウトの墓に興味があつたので平戸の横島を訪れた帰り、東陽院を訪ねるつもりであつた。寺院に墓が現存するかどうか照会の手紙を出したところ、その回答に接したが、墓は無いとのことであつた。けれど過去帳に記載があり、それには

明和五 戊子

一、阿蘭陀人外科別ニ記有リ今略誌

四月五  
日茶毘

とあるという。

「別に記有リ」とあるが、現任職・斎藤直成氏によれば、「これ以上の資料はなく墓碑もございません」ということであつた。

ド・ハウトに注目し、京都在住の医師阿知波博士に墓の有無と過去帳について調査を依頼し、その回答を「蘭館医ド・ハウトの死について」と題して『日本医師学雑誌』(第十二卷第二号)に発表したのは、慶応大学名譽教授大鳥

蘭三郎氏であった。同氏はド・ハウト (de Haut) をド・ホウト (de Hout) としておられる。が、筆者の判読に誤りがなければ、たしか蘭館日誌の記載は de Haut となつていたと思つ。

一七七八年七月二十七日 (元文元年七月四日)、オランダ東インド会社の上席商務員ヘンドリック・ホットフリート・デュールコープ (Hendrik Gottfried Duurkoop) は、日本へ向う船「ハイス・ト・スペイク」(Huis te Spijk) 号上で亡くなつた。早速、その遺骸に防腐処置をほどこし、鉛の棺<sup>(B)</sup>に入れて長崎まで運び、稲佐の蘭人墓地に埋葬した。かれは出島の商館長に着任する途次、不慮の死をとげたものである。ハイス・ト・スペイク号が長崎に到着したのは同年八月九日 (七月十七日) のことで、約一週間後に遺体を葬つた。蘭館日誌の記述は次のようになつてゐる。

八月十五日 (元文元年七月二十三日)。

最近到着したジャンクは荷を卸しはじめ、金曜日ごろ船は空になる。ヘンドリック・ホットフリート・デュールコープ氏の遺骸は、日本人が驚くほど、当地の現状で許される限り華麗に、相應の礼をもつて埋葬された。

#### Zaturday

15. Wierd de laatst g' arriveerde jonk gelost en raakte teegens de vriddag leedig, vrede wierd 't lijk van wylien d'Heer Hendrik Gottfried Duurkoop, met alle moogelijke staatsie, zo verre de gelegenheyd 't hier toelaat, tot verwondering der Japanders, behoorlijk ter aarde besteld.

デュールコープの葬儀の様子を最も如実に描いているのは『紅毛雑話』の記事である。安永六年、七年と二度ばかり長崎に遊学した林子平は、デュールコープの葬式を目撃する機会にめぐまれ、その時の体験談を森島中良に語り、森島

はそれを伝聞として紹介したのが「紅毛人葬式」である。次に全文をひいてみよう。

往年「ジュールコープ」といふ加毘丹、瓜哇より日本へ渡海の洋中にて病死したる死骸を、長崎稻佐山の悟真寺へ是は紅毛人を葬送したる始末を、玄沢子（大槻玄沢のこと）引用者）の物語にて聞しに先、屍の腹を剖て臟腑を引出し詰物をして其切り口を縫合せ此其屍をして朽ざらしめんが爲なり。すべて彼邦にて死人を黒き服を着て臥棺に収め、黒き女は後部の喪服なり。種々の詰物有てとくと詰、其柩の上を漚背にて塗固めて船中に安措し、海の上に日数を歴て後、長崎へ着岸の上、葬礼を行ひける時の式は、棺へ黒天鵝絨の覆をかけ、棒は豎に二本、横に三本入て、かつぐやうに作りたり。切悟真寺まで見送りの蛮人数多、各黒き喪服を着し、黒羽二重の裁にて作りたる、頭より左右の肩へ垂るやうに製したるものを着たり。

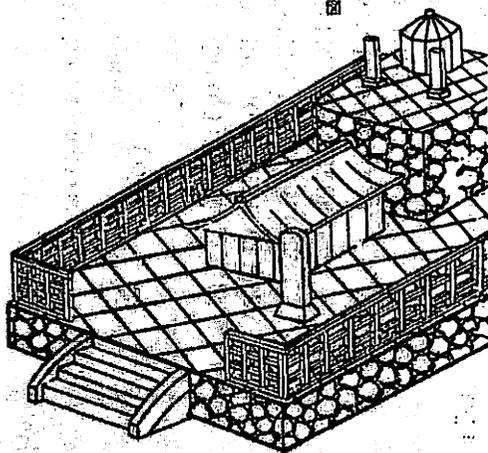
葬穴を深く掘て柩を収むる事、比邦にさしてかける事なし。中人の葬式も大抵此おもむきのことなるよしなり。石碑は横石なり。横文字にて銘を刻む。石面の一ツ旁に、砂時計の両方に、鳥の翼を置たる紋を彫付たり。是は我邦の判事物の様なる事なり。砂時計は機関の砂の落切りたるをもて、呼吸の絶したるにたとへ、左右の翼は、此人死しても、名は千万里の外に飛といふ意なるよしなりとぞ。

彼国の人嘗論を画に書事多し。大抵此類の画組なり。林子平が見たる加毘丹の葬式も玄沢子の話と同じ。興昇の日廂二十人に、阿蘭陀人の印の付たる看板（しるしばんてんの意）引用者）を着せしめ、柩ならびに見送りの蛮人、西洋館の水門より稲佐の湊まで、十八丁の海上を船にて行。棺を乗せたる舟と差添の加毘旦の舟へは、布交の旗を立てたり。

切悟真寺の仏前に棺を昇居る時、住僧および長崎惣寺々の僧徒、のこらず出て読経す。夫より跡の取置はすべて寺の例にまかする事なり。可笑は和尚の引導なり。紅毛の死人の耳へは何と道入るや。通詞がなくてはわかりかぬべし。

「長崎聞見録」にも「阿蘭陀人の墓」と題する記事があるが、そこには板屋根で覆われたデュルコープの墓の絵が添えられている（さし絵を参照）。

阿蘭陀人墓之図



板屋根のついたデュルコープの墓  
〔長崎聞見録〕より

阿蘭陀人の墓は。長崎稻佐邑。悟真寺にあり。昔時カビタン。舟中にて死たるを。砂糖漬にして持来り。此寺に葬る。其墓あり。もつともカビタン以下。黒すまたろす（黒人の召使い——引用者）杯の類は。墓といふ事もなし。犬馬の死たるに齊しく。其儘埋置事也。もし船中にて死たるハ。海中に捨るとなん。或は其カビタンの墓も。香花を手向るといふ事もなし。たゞその恩厚に預りたる売婦など。参詣するのミとなん。もつとも。墓に文字を彫と云事もなし。墓のまへに三ツ石を立たり。是ハ寺僧より事のよしを記したる石なり。爰をもつて漢字にて彫たり。しかし是もミな磨滅して。見へざるなり。墓の形は左に図す。

デュルコープが埋葬されたのは、現在のオランダ人墓地を入って左上段（一段高くなっている所）の地であるうか。それがいつの頃か、おそらくは江戸時代中期であるうが、墓石だけを今の下段に移したものと思われる。幕末に來日した写真家フェリックス・ベアト（一八二五〜？）が長崎で撮った写真の中に、悟真寺オランダ人墓地内の写真があり、それにははつきりとデュルコープの墓が写っているから、幕末にはすでに今の場所に在ったことがわかる。

デユルコープの墓碑は、日本に現存する西洋人の墓の中でも最も古いものであるだけでなく、形も一番大きいのである。

碑文は次のようなものである。

MORA



VOLAT

TER GEDAGTENISSE

VAN HET HIER RUST END GEBENTE

VAN WYLENDEN WELEDELEN

ACHTBAREN HEER

HENDRIK GODFRIED

DUURKOOP

IN LEEVEN

OPPERKOOPMAN EN OPPERHOOFD

VAN WEEGENS DEN HANDEL

DER NEDERLANDSCHE

GEOCTROY TER DE OOST

INDIASCHE COMPAGNIE

IN DIT KEYSER RYK

GEBOOREN

TE DOORNUM IN OOST VRIESLAND  
DEN V MAY A° MDCCXXXM  
OVERLEDEN  
OP HET SCHIP THUYS TE SPYK  
OP DE NOORD DER BRETE VAN  
DEN XXVII JULY 26 GP 38 M  
IN DEN OUDERDOM  
VAN XXXXII JAAREN



日本におけるオランダ人墓

H. G. デュルコープの墓 (筆者撮影)

II MAANDEN EN XXII DAGEN  
EN DEN SCHOOT DER RUST  
ANN BETROUWD  
DEN XV AUG A° MDCCCLXXVIII

墓の大きさは横一メートル十五センチ、縦二メートル七十八センチ、地表の石の厚さ二十八センチある。ここで不思議に思われるのは、墓標の設置が認められてデュルコープの時代まで一世紀近くになり、しかも何百人ものオランダ人が死んでいるのに墓碑(石)が無いことである。幕府への遠慮からあえて墓を立てなかったものか。

ともあれ、今ひいた碑文の意味は次のようなものである。

時は休みなく過ぎ去る（ラテン語）。

ここに横たわる畏敬すべきヘンドリック・ホットフリート・デュルコープ氏の亡骸のために。

かれは生前、オランダ王国の東インド会社の商館に所属する上席商務員兼商館長であった。一七三六年五月五日、東フリースラントのドールムで生まれた。七月二十七日、四十二歳と二カ月と二十二日で北緯二十六度西経五十八度の地点を航行中のハイス・ト・スベイク号上で亡くなり、一七七八年八月十五日眠りについた。

デュルコープの墓は物見高い人間にかっこうな対象であった。江戸時代、長崎に遊んだ多くの文人墨客も稲佐の蘭人墓地を訪れている。たとえば、司馬江漢は天明八年四月二十三日（一七八八年五月二十八日）、絵の修業のため長崎へ赴き、長崎滞在中の同年十月二十六日（一七八八年十一月二十三日）、オランダ人墓地を見学を訪れた。「江漢西遊日記」に次のようなくだりがある。

廿六日 少々雨天。向地稲佐悟真寺に行き、唐人、おらんだの墳を見る。皆臥たるまゝに葬。蘭人ツール・コップ（デュルコープのこと——引用者）と云人の塚、石をカマボコ形りにして、何やら蘭字を彫り、金箔を入れ、上に砂時計を彫る。是は漏刻（水時計、寸時の意——引用者）つきたる譬へなり。

デュルコープの墓には、上部に砂時計、下部に犬又はライオンらしき動物と小さな十字架が彫刻されている。この

一文によると、昔は蘭字と彫刻に金箔が入れられていたことがわかる。キリシタン禁制時代に墓に十字架を刻んだことは珍しく、幕府も黙認したものであろう。

侍医桂川甫周国瑞（二七五〜一八〇九）の編著「北槎聞略」にもデュルコープの墓に言及したくだりがあり、それには、

按るに長崎稻佐山悟真寺（オランダ）に和蘭陀加比丹（オランダ）デュルコープといへるが墓あり。石碑は六尺計の石を仰面に置、上に兩覆（板屋根のこと）引用者有。碑文は上の方に号章をしるし下に官名を刻す。（後略）

とある。

一九八七年十月十六日（天明七年九月六日）、ローゼンブルフ号の船長トーマス・ファン・トリートが出島で亡くなった。次にその碑文を掲げる。

HIER RUST HET

STERFLYK DEEL

Van den

WEDEL MAN HAETEN

Heer THOOMAS van TRIFT

gebooren te ROTTER DAM

in Zyn WELLEDEL Leeven  
CAPTAIN ter ZEE  
Commandeeren TE Compagnie  
Schip ROOSENBURG  
gestorven ten Eylanden DECIMA  
den XVI: October  
A° MDXXL XXXVII

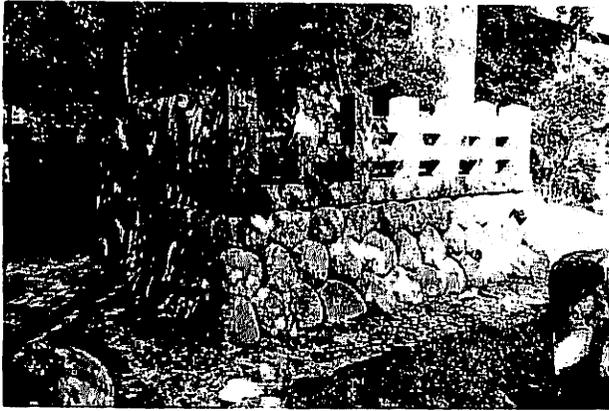
高貴して勇敢なトーマス・ファン・トリフト<sup>マ</sup>の亡骸ここに眠る。

ロッテルダムに生まれ、生前、オランダ東インド会社所属のローゼンブルク号を指揮した。一七八七年十月十六日出島で死去。

ファン・トリフト船長の死については、蘭館日誌に記事がある。死因については定かでないが、おそらく流行病に患かつて逝ったものか。かれが亡くなった年は死者が多く、十七人余の船員が相次いで死亡している。

一七八七年十月十六日(天明七年九月六日)。

今朝六時ごろ、当地においてローゼンブルク号の船長トーマス・ファン・トリフト<sup>マ</sup>(ロッテルダム出身)は、亡くなった。



ヘイスベルト・ヘンミイの墓 (筆者撮影)

16<sup>e</sup>. Heden morgen is alhier, circa ses uren koomen te overlyden den captain van't schip Roosenburg Thomas van Triet, van Rotterdam.

亡くなつて二日後の十月十八日(陽曆)、その遺骸は稲佐に埋葬された。

今日の午後、故海軍大尉トーマス・ファン・トリートの亡骸を、当地の現状で許されるかぎりの立派な葬儀をもつて葬つた。

18<sup>e</sup>. Heeden na de middag het lyk van wylen den Captain ter zee Thomas van Triet met alle mogelyke statie, zo verre de gelegendheid 't hier toelaat behooryk ter aarde besteld. —

静岡県掛川市仁藤町に天然寺(浄土宗)という古刹があり、本堂(再建したもの)の前の駐車場を西方に少し行つた所が墓地となっている。ここに参府の帰途、客死した出島のオランダ商館長ヘイスベルト・ヘンミイ(Gijsbert Hemmij) 一七九三〜九八年まで在勤)の墓がある。

『掛川誌』に

寛政十年四月廿四日 紅毛人傑ゾウキョウ以思別イシベ□ハシ辺米ヘノメと云ふもの 渴病にて 掛川の逆旅に死す 全廿五日 天然寺中に葬る墓表なし 長さ四尺許の墓石を土上に置て 上面に蚕文を刻せりとある。<sup>(19)</sup>

ヘンミーの墓については大正期より現在に至るまで何人かの史家が論文を発表しているので、ここでは詳述するところを控える。墓の大きさは、

縦五尺七寸五分

横二尺七寸五分

厚さ、中央が六寸、両端二寸五分

である。<sup>(20)</sup>墓の全体は和洋折衷といえる。碑文はかなり風化しており、判読はむずかしい。墓のそばに記念碑（大正十四年に建てたもの）が立ち、そこに碑文が移刻されているので、次にそれをひこう。

HIER ONDER RUST

HET STERFELYKE

GEDEELTE VAN DEN

WELEDEL ACTBAAR

HEER MR. GYSBERT

HEMMY IN ZYN

EDELENS LEEVEN  
OPPERKOOPMAN  
EN OPPERHOOFD  
VAN DEN JAPANSEN  
HANDEL GEBOREN  
DEN 16 JUNY 1747 EN  
OVERLEEDEN DEN  
8 DITO AD 1798 EN  
BEGRAAVEN DEN 9 JUNY  
1798

この原文の訳文は、

此地下静座の体あり、恭ふべし、尊ふべし名を「ゲイスベルト」「ヘムメイ」先生と称する君の生を終へたる処なり、先生存命のあひだ職に在つて主る所は、日本国交商の大商館と鑿船師を撰たり、我紀元一千七百四十七年六月十六日誕生、同一千七百九十八年六月八日往生而葬之。維時一千七百九十八年六月九日

となつてゐる。ヘンミイの墓は安政の大地震によつて大きな被害を受け、その後江戸参府の貢使が金五十兩寄進して修理をほどこし、毎年金二兩香花料を寺に寄進した。歴代の商館長の中には赤ブドウ酒を携えて墓に詣で、泉下のへ

日本におけるオランダ人墓



ヘイスベルト・ヘンミイの墓 (筆者撮影)

ンミイの霊を慰めるものも少なくなかったが、日蘭関係が冷えて来るのと相俟つて墓参の人も絶え絶えとなり、次第に顧みられなくなった。

ヘンミイの史跡に世の注意を喚起し、保存計画を推進したのは京都帝国大学教授新村出博士であった。

大正十一年（一九二二年）皇后陛下の行啓につづいて、翌十二年四月下旬、オランダ公使館の通訳官文学博士J・フェンストラ・カイベル (Feenstra Kuiper) が墓の見学と古文書の調査に天然寺を訪れたのを機に、記念碑の話が具体化し、オランダ公使館も建設費の一部を負担し、現在のような碑が建った。

ともあれ、ヘンミイの墓は、現存するオランダ人の墓の中でも、ファン・トリートのもの continuing、三番目に古いものなのである。

時代は更に下つて十九世紀になると、日本側の史料（年番阿蘭陀通詞の記録）にも、オランダ人の死去・検死・葬送についての記述が散見する。

ヤン・フレドリック・フェルケ (Jan Fredrik Feilke、一七八〇〜一八一四) は一八〇三年に出島の医官として来日し、商館長ゾーフに従つて三度ほど江戸参府を行ない、桂川甫賢（江戶後期の蘭方医）などに医学上の知識を授けた。が、一八一四年七月二十八日（文化十一年六月十二日）出島において病死した。『甲文化十一年 万記帳 戊正月吉日』に、フェルケの病没と検死に関する記述がみられる。

同十二日

一 於「出島」外科阿蘭陀人今晝致「病死」候段申出候二付、病死御改并葬御見届為「見送り」、阿蘭陀人稻佐へ罷越候二付、

仕役伺帳御役所へ植林鉄之助持参御伺申上候所、被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御聞濟<sub>一</sub>候ニ付、乙名方波戸場<sub>江</sub>掛合諸手当致ス、此方出役之儀手  
伝致置<sub>ク</sub>

同日

一 右仕役ニ付、刻限八ツ時御案内として立石秀太郎御役所<sub>江</sub>罷出候処、御檢使小川庄太郎殿出島<sub>江</sub>御出被<sub>レ</sub>成御改相濟候上、  
為<sub>二</sub>見送<sub>一</sub>悟真寺<sub>江</sub>阿蘭陀人罷越書上役人付此方より差出ス

蘭館日誌にも上外科フェルケの記事がある。

七月二十八日(木曜日)。午前三時に、当地においてかれこれ三十五歳になる上外科ヤン・フレデリック・フェルケが亡く  
なった。同人はホールン(アムステルダム)の北四十二キロ——引用者)生まれ。病いのためやせ衰えていた。昨年十二月より  
病いに苦しんでいた。……遺体を午後埋葬した。

Donderdag

28.—De morgens om drie uren overleed alhier in ouderdom van circa vyfen dertig jaaren den oppermeester Jan  
Frederik Feilke, geboren van Hoorn, aan een witeerend zieke, waarvaan by zeedert de maand December des gepasseerden  
jaars gelaboreerd had, — en het lyk des namiddags ter aarde besteld.

フェルケの墓は、残念ながら現存しない。同年九月二十六日(文化十一年八月十三日)、水夫一名(名前不詳)が

日本におけるオランダ人墓

病死したが、これも『万記帳』に葬送の記事がみられる。

同日

一 水主阿蘭陀人壹人、於<sub>二</sub>出島<sub>一</sub>病死致候ニ付、御意次第悟真寺<sub>江</sub>葬送致候ニ付、為<sub>二</sub>御改<sub>一</sub>御検使島田政右衛門殿出島<sub>江</sub>御出被<sub>レ</sub>成、仕廻<sub>ニ</sub>書上役人付差出す

これに相当する記事は蘭館日誌に次のように記されている。

九月二十六日。水夫一名死亡、埋葬す。

13.— Een matroos overleeden en begraven.

次に悟真寺の過去帳（八冊あつたが原爆で失なわれた——木津義彰氏談）に記載されていたオランダ人の記事と現存する墓碑（碑文）を次にしるす。

板沢博士が戦前悟真寺の過去帳の中から抜き書きしたものの中で一番古いものは、次のようなものである。

十八日 ヘルキウニススミット

文政四年己七月 筆者 阿蘭陀カピタン墓所脇ニ葬 二十歳

「阿蘭陀カピタン墓所」とは商館長デュルコープの墓を指すものと考えられる。デュルコープの墓の頭部のそばに、文字がすっかり磨滅している墓が一基ある(墓地図を参照)。おそらくこれがスミットのものであろう。戦前まで氏名と没年位は判読できたようである。板沢博士は *Hermanes Smit. † 1821* と記している<sup>(22)</sup>。

「ヘルキウニススミット」とは「ヘルマヌス・スミット」(*Hermanus Smit*) のことで、この人物の死去については蘭館日記に記事がある。

一八二二年八月十五日(文政四年七月十八日)

出島。今日の夜十二時頃、発熱のためやせ衰えたすえ、肺結核により一等書記ヘルマヌス・スミット死去せり。

*Decima den 15 Augustus 1821*

*Heden nagt circa 12 uur overleed aan de gevolgen van een uitteeren de koortsen, longtering de klerk der 1<sup>e</sup> classe Hermanus Smit,……*

スミットの遺体は、腕に黒いクレープの喪章をつけた乗組員たちによってかつがれ、船長及び出島の事務員たちが水門まで見送ったとある。八月十五日午後三時に埋葬式が行なわれ、会葬者は四時十分すぎに帰って来た。棺の上にしゅすの布がかけられ、更にその上をオランダ国旗が覆っていた。立派な葬儀であったと蘭館日誌は記している。

一八二四年二月十七日（文政七年一月十八日）、元出島商館長ヘンドリック・ドゥーフ（Hendrik Doeff、一八〇三〜一八一七年まで在任）と寄合町京屋（藤田茂八）抱の遊女瓜生野（土井徳兵衛の娘よう）との間にできた丈吉（道富丈吉）は、十七歳を一期に新大工町の自宅で亡くなった。当時、丈吉は唐物目利役（舶来品の鑑定者）を生業としていたが、長煩いののち逝った。蘭館日誌に丈吉の死去についての記事がある。

一八二四年二月十八日（文政七年一月十九日）。

私は昨夜、元商館長ドゥーフの庶子、シヨキツ（丈吉のこと——引用者）が、長い苦しい病気のすえ亡くなった、という報告を得た。

18.—Ik kreeg bericht dat Sjokits, de natuurlijke zoon van het voormalig opperhoofd Doeff, na een lang duurzame pynlijke ziekte, den avond te voren overleden was.——

日蘭混血児丈吉の墓は、寺町の皓台寺裏手の後山墓地（中腹に位置）にある。墓は、長方形の棹石に五輪塔を乗せたもので、中央部の棹石に「徳芳院道富貴大姉」（丈吉の妻の戒名か？）と「道富院円覚良通居士」（法名）の二行が刻まれている。また石の側面には「文政七年甲申正月十八日 俗名 道富丈吉 行年十七歳」とある。

また皓台寺過去帳（安政五年〜八年まで記載したもの）には、

文政七年甲申正月十八日

道富院円覚良通居士

新大工町道富丈吉事

とある。

一八二八年十二月十八日（文政八年十一月九日）、水夫ヤン・ファン・デン・ベルク (Jan van den Berg) 十九歳

は、出島の医官シーボルトの看護を受けながら逝った。

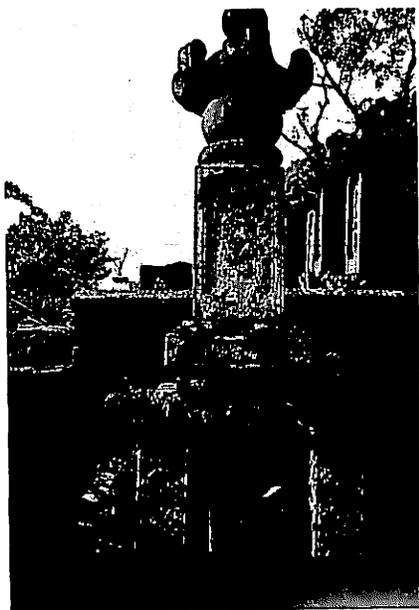
同人の墓は現存しないが、蘭館日誌中の記事を紹介しておく。

一八二八年十二月十八日（日曜日）。

朝、フォン・シーボルト医師から知らせが来た。水夫ヤン・ファン・デン・ベルクが重病であり、船に移せないという。そこでかれが当地に留まれるよう長崎奉行所に請願した。

……

……今夕六時半に、アムステルダム生まれの水夫ヤン・フ



皓台寺墓地にある丈吉の墓（筆者撮影）

アン・デン・ベルク十九歳が亡くなった。

Zondag

18. — 's Ochtends berigt mij de Doctor von Siebold, dat de matroos Jan van den Berg zoo gevaarlijk ziek ligt, dat hij niet naar boord kan getransporteerd worden. Ik liet daarop het Gouvernement verzoeken, dat hij hier mogt blijven. 's Avonds om half zeven ure is de matroos Jan van den Berg, oud 19 jaren, geboren te Amsterdam, overleden.

この水夫は翌十九日、稻佐の墓地に葬られたが墓は残されていない。

一八四〇年八月三日(天保十一年七月六日)、ルイ・シャルル・ジャック・ド・リニイ(Louis Charles Jacques de Ligny、水夫か?)が病死した。同人については、悟真寺の過去帳に、

エルセイテリクネイ

天保十一年七月朔日入船同七月七日病死

二十三歳

とある。が、碑文にある死亡年月日と一日のずれがある。同人はおそらく出島の病院で亡くなったものであろう。墓の刻字は完全に磨滅しており、墓の位置も定かでない。戦前までははっきり文字が読めた。

HIER RUST  
LOUIS CHARLES  
JACQUES DE LIGNY  
GEBOREN TE ZIRIKZEE  
DEN 1 JUNY 1817  
OVERLEDEN TE DESIMA  
DEN 3 AUGUSTUS 1840

ルイ・シャルル・ジャック・ド・リニイ、ここに眠る。一八一七年六月一日、ゼーリックゼー（オランダ南西部ゼーラント州の町—引用者）に生まれ、一八四〇年八月三日出島において死去。  
過去帳に、

イエムスウトルメエル

本国船乗組按針上司士官

同曆辰年（天保十五年—引用者）七月十九日 四十一歳

とあるくだりは、操舵士官イエー・エム・ズーテルメーヤ（J.M. Zoetermeer）のことである。これは蘭館日誌の次のくだりに相当する。

一八四四年九月一日（天保十五年七月十九日）。

昨夜出島において、オランダのフリゲート艦パレンバング号の上席舵手ウィレム勲章を授けられたズーテルメーヤが亡くなった。今日の午後、稻佐に埋葬。

1.—In de gepasseerde nacht overleed te Decima de opperstuurman van Z.M. fregat Palembang, ridder der militaire Willemsorde Soetermeer. —Is heden achtermiddag op Inassa begraven.

ズーテルメーヤの墓は現存し、文字もはっきり読み取れる。碑文は次のようなものである。

HIER RUST

J.M. ZOETERMEER

RIJDER DER MILITAIRE

WILLEMS ORDE

OPPERSTUURMAN

ANNBOORD VAN Z.M.

FREGAT PALEMBANG.

OVERLEDEN TE DESIMA

DEN 31<sup>STEN</sup> AUGUSTUS

1844

ウィレム勲章爵士でオランダのフリゲート艦パレンバング号の上席舵手イエー・エム・ズーテルメーヤ、ここに眠る。一八四四年八月三十一日出島で死去。

同年十月二十七日(弘化元年九月十六日)、パレンバング号の軍医セー・イエー・ルツテケンが亡くなった。同人に関する記述は、悟真寺の過去帳や蘭館日誌にも見当らない。墓はズーテルメーヤの墓石のとなりにある。

HIER RUST

C.J. ROETTEKEN

OFFICIER

VAN GEZONDHEID

ANNBOORD VAN Z.M.

FREGAT PALEMBANG

OVERLEDEN TER

REDEDE VAN NAGASAKI

DEN 27<sup>STEN</sup> OCTOBER

1844

オランダのフリゲート艦パレンバン<sup>パレンバン</sup>号の軍医士官セー・イエー・ルツテケン、ここに眠る。一八四四年十月二十七日、長崎の船地で死去。

一八五二年十月十一日(嘉永五年八月二十八日)、商館員エフ・セー・ルカス(F. C. Lucas)が亡くなった。墓碑は現存するが、過去帳及び蘭館日誌に記事がない。

HIER

LIGT BEGRAVEN

F. C. LUCAS

ADJESSENT DER 2<sup>e</sup> KLASSE

BY DE FACTORY VOOR DEN

NEDERLANDSCHEN HANDEL

OP JAPAN

GEBOOREN TE ROTTERDAM

DEN 25 OCTOBER 1817

GESTORVEN OP DESIMA

DEN 11 OCTOBER 1852

エフ・セー・ルカスここに葬らる。日本におけるオランダ商館の二等商務員補であった。一八一七年十月二十五日ロツテル

ダムで生まれ、一八五二年十月十一日出島で死去。

一八五五年八月四日(安政二年六月二十二日)、水夫ヤコフ・ド・ボーム (Jacob de Boom) が病死した。水夫の墓はそれまで建てられなかったようであるが、立派な墓碑が現存する。

HIER LIGT BEGRAVEN

JACOB DE BOOM

MARINIER DER II DE KLASSE

ANN BOORD

Z.M. STOOMSCHIP GEDEH

OVERLEDEN

DEN 4 DEN AUGUSTUS 1855

ヤコフ・ド・ボーム、ここに葬らる。オランダの蒸気軍艦ヘデー号の二等水兵。一八五五年八月四日死去。

この墓の碑文はかなり磨滅している。やや判読に困難を覚える。

一八五五年八月十一日(安政二年六月二十九日)、機関手シイメン・シッピル (Sijmen Schipper) が逝った。同人についての史料は見当らない。墓は現存する。

HIER LICHT BEGRAVEN

SJUMEN SCHIPPER

MACHINIST DER 1<sup>STE</sup> KLASSE.

ANN BOORD

Z. M. STOOMSCHIP GEDEH

OVERLEDEN

DEN 11 DEN AUGUSTUS 1855

シイメン・シッヘル、ここに葬らる。オランダの蒸気軍艦ヘデー号の一等機関手。一八五五年八月十一日死去。

一八五七年一月八日（安政三年十二月十三日）、パタビアから長崎への航海中、船長ヘンドリック・ド・ウェインは亡くなった。その遺骸は船が長崎入港後稲佐の墓地に葬られた。墓碑は現存し、文字もはっきり読み取れる。

HIER

LICHT BEGRAVEN

HENDRIK DE WIJN

IN LEVEN

GEZAGVOERDER

VAN HET NEDERLANDSCH  
KOOPVAARDIGSCHIP  
WILLEMINA EN CLARA  
GEBOREN TE TEXEL  
OVERLEDEN  
DEN 8 JANUARIJ 1857  
OP DE REIS VAN  
BATAVIA NAAR NAGASAKI

ヘンドリック・ド・ウェイン、ここに葬らる。生前、オランダの商船ウイレミナ・エン・クララ号の船長であった。テクセル（フールト・ホラント州北部の島―引用者）で生まれ、バタビアから長崎への航海中、一八五七年一月八日死去。

同年十二月六日と十二日（安政四年十月二十日、二十六日）、カッテンディケ海軍少佐の率いる第二次海軍派遣隊の隊員二名が、日本に着いて数カ月も経たぬうちに亡くなった。一人は一等水兵エム・イエー・ハー・ダレル（三十九歳）、もう一人のほうはイエー・ステッケレンブルフ（三十五歳）である。部下の死去について、カッテンディケは『一八五七年の日本』（『日本滞在日記抄』の仏訳）の中で、

日本に着いて間もなく、水兵が二人亡くなり、基地に埋葬された。棺が墓穴におろされると、近所のお寺から僧衣を着た坊さんが来て、お経と焼香をさせて下さい、と言ったので、同意を与えることにした。……

と述べている。

両人の墓は並んでおり、刻字の判読はやや難である。

HIER

LIGT BEGRAVEN

M. J. H. DADELER

MATROOS DER 1<sup>STE</sup> KLASSE

BIJ DE

NEDERLANDSCHE MARINE

GEBOREN TE GRIES WALDEN

DEN 21<sup>STE</sup> JUNIJ 1818

OVERLEDEN TE DESIMA

DEN 6<sup>DE</sup> DECEMBER 1857

エム・イエー・ハー・ダレル、ここに葬らる。一八一八年六月二十一日、フリースウォルデンに生まれ、オランダ海軍の一等水兵であった。一八五七年十二月六日出島において死去。

HIER

LIGT BEGRAVEN  
J. STEKELENBURG  
MATROOS DER 1<sup>STE</sup> KLASSE  
Bij DE  
NEDERLANDSCHE MARINE  
GEBOREN TE NOODDORP  
DEN 19<sup>DE</sup> JULIJ 1822  
OVERLEDEN TE DESIMA  
DEN 12 DEN DECEMBER 1857

ここにイエー・ステッケレンブルフ葬らる。オランダ海軍の一等水兵であつた。一八二二年七月十九日ノートドルプで生まれ、一八五七年十二月十二日出島で死去。

一八五八年九月九日(安政五年八月三日)、出島のオランダ商人イエー・ヘルラハの妻アンナ・マリア・フィツセル(Anna Maria Fischer)は難波ののち救出されたのであるが、この日亡くなつた。享年二十二歳であつた。オランダから筆者のもとに來た報告によると、彼女は一八三六年四月七日午前十時、アムステルダム市の下町シント・アントニスブレーストラート(Sint Antonies breestraat)二十八番地(現在の六十六番地)で生まれた。父親の名はヘオルフ・フレデリック・フィツセル(Georg Frederik Fischer)、当時二十六歳)、母親は、ヘールトライ・ベルク(Geertuij Berk、当時二十七歳)と云つた。

出生証明書によると、母親の弟たち（フランシスコ・ベルクとダヴィット・ベルク）が証人となっている。父の職業はパン製造業である。

アンナの墓は現存し、碑文には次のようである。

HIER RUST  
VROUWE  
ANNA MARIA FISCHER  
ECHTGENOOT VAN  
J. A. C. GERLACH  
GEBOREN TE AMSTERDAM  
OP DEN 7 APRIL 1836  
OP DEN 8 AUGUSTUS 1858  
GERED VAN HET GESTRANDE  
SCHIP CADSANDRIA  
OVERLEDEN ANN DE GEVOLGEN  
VAN DEN DOOR GESTANEN  
SCHIPBREUK TE DESIMA  
OP DEN 9 SEPTEMBER 1858

イエー・アー・セー・ヘルラハの妻アンナ・マリア・フィッセル、ここに眠る。一八三六年四月七日アムステルダムに生まる。一八五八年八月八日、座礁したカドサンドリア号から救出され、難船によって一八五八年九月九日、出島において死去。

一八六〇年二月二日（万延元年一月十一日）、グイド・ヘルマン・フリドリッ・フェルベック (Guido Herman Fridolin Verbeck 一八三〇〜一八九八、宣教師・英語教師・大学南校の教頭) の娘エンマ・ヤポニカ・フェルベック (Emma Japonica Verbeck) が亡くなった。彼女の両親が長崎にやって来たのは一八五九年十一月（陽曆）のことである。エンマは生後一週間で亡くなっている。墓は現存し、その大きさは縦九十五・五センチ、横八十四センチ、厚さ十八・五センチである。碑文にはわずか三行しか刻まれていない。

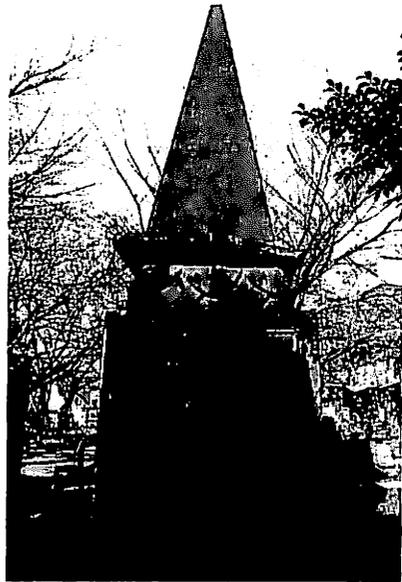
EMMA J. VERBECK

BORN JAN. 26. 1860

DIED FEB. 2. 1860

エンマ・イエー・フェルベックは、一八六〇年一月二十六日生まれ、一八六〇年二月二日死去。

幕府は安政六年（一八五九年）五月以後、神奈川・箱館・長崎等を開港し、米・英・露・仏・蘭との通商を許可したが、外国船の入港が増加するにつれて、外国人に対する殺傷事件もひんばんに起った。一八五九年八月二十五日（安政六年七月二十七日）、ロシアのシベリア提督ムラビエフ総督が率いる艦隊の士官と水夫三名は、横浜本町におい



ウエセル・ド・フォスとナニング・  
デッケル両船長の墓 (筆者撮影)

て水戸の清水弁之進らによつて殺され、同年十一月十三日(陰曆十月十一日)には、フランス領事代理ルレイロの従僕(清国人)が横浜弁天通りで過激浪士の手にかゝつて殺害された。一八六〇年一月二十九日(万延元年一月七日)イギリス公使館付通弁伝吉は、高輪泉岳寺門前町——公使館の入口で、刺殺された。

同年二月二十六日(陰曆二月五日)——夜七時半ごろ、横浜本町四丁目と五丁目間の大通りで、オランダのブリッグ船クリスティアン・ルイ号の船長ウエセル・ド・フォス(Wessel de Vos)とスクーネル船ヘンリエツ

テ・ルイサ号の船長ナニング・デッケル(Nanning Dekker)ら二名は、大刀を帯びた日本人によつてずたずたに切られた。<sup>(24)</sup>デッケル船長は横浜に着いて三日目に遭難したもので、両人は買物中に背後から襲われ、あたりは血の海と化したといふ。<sup>(25)</sup>

二人は、貨幣・所持品を奪われなかつたから、攘夷の犠牲となつたものである。オランダ総領事ポルスブルックより幕府に対して、両人の慰藉料として一人二万五千ドル(メキシコドル)、計五万ドル及び犯人を捕え死刑にするよう、要求が出された。ひとまず各船長の寡婦と遺児へ千四百ドルずつ支払われ、また横死を遂げた船長たちの墓を建てるために、横浜在住のオランダ人は金三百ドル醵金した。

この二人のオランダ人を検視した日本人医師（蘭方医）の報告書が駐日オランダ公館文書（マイクロフィルム）<sup>(26)</sup>の中にあるので、それを紹介しておこう。その一つは、医師加藤宗春が認めたデッケル船長の死体についての検視所見（蘭文まじり）である。

瘡瘡寸方<sup>并ニ</sup>針數覚

*beschouwing Dokter*

*van de* [.....] *tot* [.....]

一 左ノ面部眼ノ下ヨリ肩先迄 尺拾九針 <sup>並ニ所</sup>

*van de arm tot* [.....] 5 Naalden

一 左ノ耳ヨリ耳後 五寸七針

*Afstukken van de linkerzijde* 35 Naalden

一 右ノ額眼鼻切り落 <sup>並ニ所</sup> 三拾五針

*Afstukken van de rechterkant* 25 Naalden

一 右ノ手先切り落 <sup>並ニ所</sup> 貳拾五針

日本におけるオランダ人墓

*Afzaken van Wy* [……] 5 *Naalden*

一 左ノ食指切り落疵

三ヶ所

右之通り御座候

*Docter*

*Katoo Zoo* [……]

加藤宗春<sup>㊦</sup>

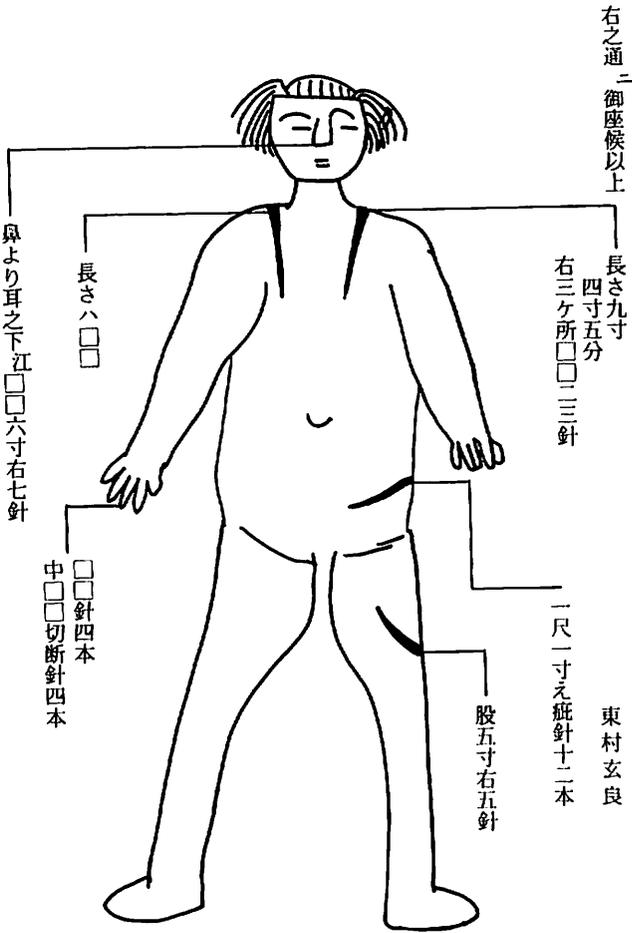
上

所見に「きんそう瘡」とあるから、刀による切りきずによって死んだことがわかる。刀は左の眼の下から肩峰・鎖骨部を切り下ろし、前頭部下の鼻を切り落している。両手の指先も切り落されているのは、二、三の太刀を手で避けようとしたときに受けた傷であろう。直接の死因は失血多量であろうか。傷口はすべてあとで縫合されている。

「フォスの検視報告」(*Ykschouwing de Vos*)とあるものは医師・東村玄良が描いたもので、図が添えられており、凄惨をきわめる。フォス船長も刀きずによつて死んでいるが、その刀痕の範囲は、前頭部下の鼻から耳の下にかけて約十八センチの切り傷一本、左右の鎖骨部に約三十センチの切り傷が二本、左の側腹部に約三十センチの切り傷一本、前大腿部に上から斜め下に約十五センチほどの切り傷が一本ある。また右手の中指は切り落されたようである。次に医師東村が描いたスケッチを掲げよう。

lykschouwing de Vos  
Ka [.....] Vos

日本におけるオランダ人墓



右之通ニ御座候以上

長さ九寸  
四寸五分  
右三ヶ所□□三針

一尺一寸え紙針十二本  
東村玄良

股五寸右五針

長さ八□□

鼻より耳之下江□□六寸右七針

中□□切断針四本

[.....] 内と□□は判読不能。

フォスとデッケル両船長の墓は、高さ五メートルにも及ぶピラミッド型の墓碑である。横浜外人墓地の二十二区四十四に現存する。デッケルの碑は次のようなものである。

HIER RUST  
NANNING DEKKER  
VERMOORD TE YOKOHAMA  
TEGEN DEN AVOND VAN  
DEN 26 FEBRUARY 1860  
IN DEN OUDEROM  
VAN 40 JAREN

ナニング・デッケル、ここに眠る。一八六〇年二月二十六日の夕刻、横浜にて殺害さる。享年四十歳。  
フォスの碑文もほぼ同じものである。

HIER RUST  
WESSEL DE VOS  
VERMOORD TE YOKOHAMA  
TEGEN DEN AVOND VAN

DEN 26 FEBRUARY 1860

IN DEN OUDEROM

VAN 42 JAREN

ウェセル・ド・フォス、ここに眠る。一八六〇年二月二十六日の夕刻、横浜にて殺害さる。享年四十二歳。



ワグマンが描いたヒュースケン遭難の図  
(アムステルダム海事博物館蔵)

翌一八六一年一月十五日(万延元年十二月五日)の夜九時ごろ、プロシア公使館を出て宿舎の善福寺へ向うアメリカ公使ハリスの秘書兼通訳ヒュースケンは、芝南新門前二丁目代地のあたりまで来たとき、四、五名の侍の者に襲われ、二百ヤードほど馬を疾走させたところで落馬した。ヒュースケンは、左腕上部と左胸第九肋間に切り傷、右下腹部に刀傷(五インチ半)、小腸四分の三を切断し、出血多量で翌十六日(陽暦)の午前零時三十分ごろ亡くなった。襲撃を受けた理由は明らかでない。が、薩摩浪人——伊牟田尚平、神田橋直助、樋渡清明らと二、三の浪人が襲ったとみなされている。当夜、ヒュースケンを護衛していた役人三名(鈴木・近藤・東ら)は罷免の上、逼塞を命じられ、辻番所にいた新吉・マロロク・タツエモンら三名も免職となった。ヒュースケンの母は、幕府より洋銀一万ド



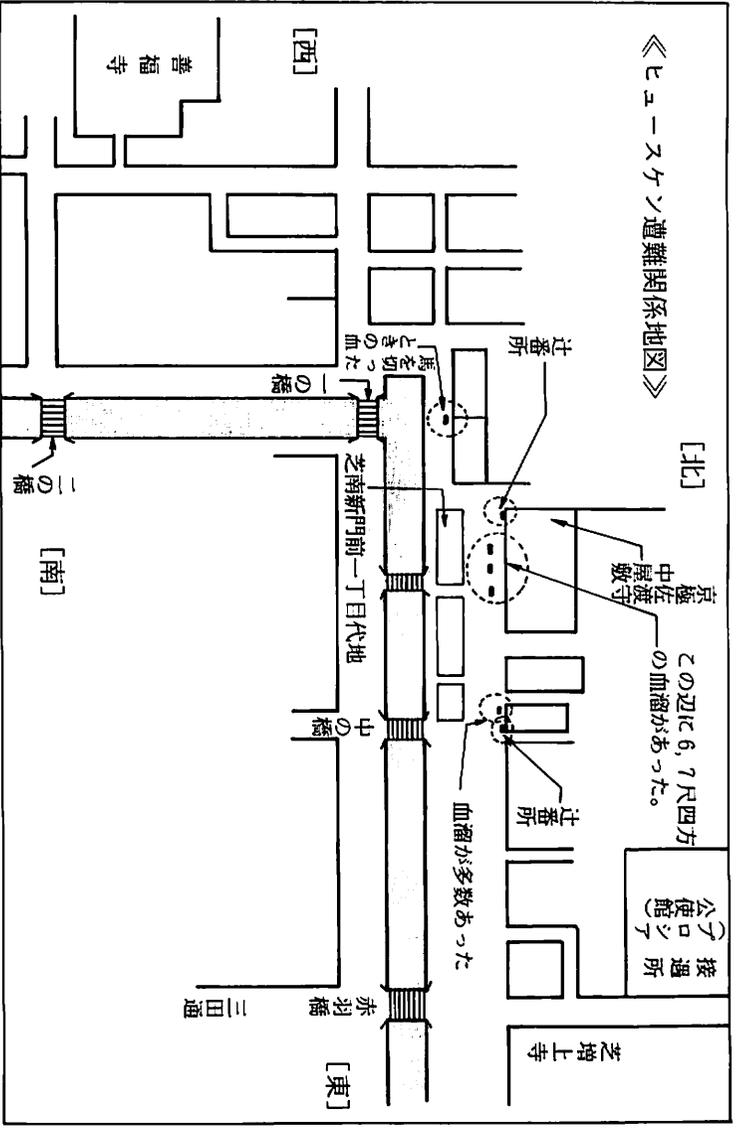
ヒュースケンの墓  
麻布・光林寺（筆者撮影）

ル（慰藉料四千ドル、扶助料六千ドル）もらった。

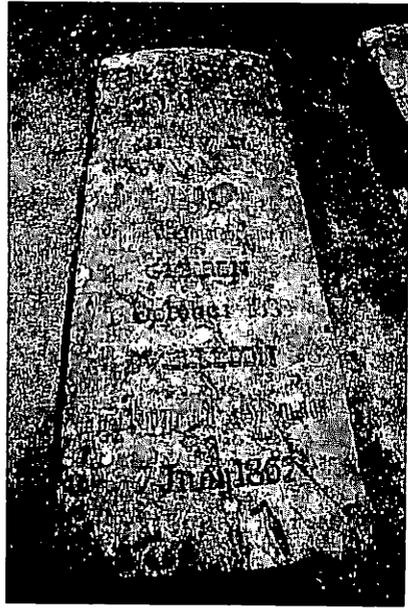
ヒュースケンは正式には、ヘンリクス・クウンラド  
ウス・ヨアンネス・ヒュースケン (Henricus  
Coenradus Yannes Huisken) という。一八三二年  
一月二十日アムステルダム市ダムラック (Damrak)  
五番地（現在の九七番地——当時の家は現存しない）  
で、石けん製造業の父ヨアンネス・フランシスクス・  
ヒュースケン（三一歳）と母ヨアンナ・スミット（二  
六歳）の子として生まれた。十四歳のとき父を失ない、  
のち母を残して渡米し、ニューヨークで暮らしていた

ときハリスと知り合い、請われてその秘書兼通訳となり、一八五六年（安政三年）夏に来日した。ヒュースケンは日本滞在中、大勢の女性と関係をもち、日本人妻おつると息子（氏名不詳）一人残して逝った。なかなか艶福家であったようだ。

ヒュースケンの遺骸は麻布・光林寺（臨濟宗妙心寺派）に葬られた。過去帳にヒュースケンの記載はないが、墓だけは今もある。公使ハリスが建てた墓碑には、英文で次のような文字が刻まれている。



日本におけるオランダ人墓



J. P. クイエルの墓 (筆者撮影)

+

SACRED

to the memory of

HENRYC HEUSKEN

Interpreter to the

AMERICAN LEGATION

in Japan

BORN AT AMSTERDAM

January 20, 1832

DIED AT YEDO

January 16, 1861

日本駐節アメリカ公使館付通訳ヘンリック・ヒュースケンの御霊に献ぐ。一八三二年一月二十日アムステルダム生まれ、一八六一年一月十六日江戸にて死去。

一八六二年六月七日(文久二年五月十日)、オランダの螺旋推進式汽船の用度係イエー・ペー・クイエル(J. P. Cuyler)は長崎で死亡し、稲佐の蘭人墓地に葬られた。墓は現存するが、刻字ははっきり読めない。

HIER RUST

J. P. CUIJER

IN LEVEN

BOTTELIËR

AAN BOORD Z. M. SCHROEF-STOOMSCHIP

[..... ? .....]

GEBOREN

6 October 1833

OVERLEDEN

in het comptoire te Nagasaki

7 Junij 1862

イェー・ペー・クイエル、ここに眠る。生前、オランダの螺旋推進式汽船の用度係であった。一八三三年十月六日に生まれ、一八六二年六月七日長崎の商館で死去。

同年七月二十七日（文久二年七月一日）、海軍大尉エヌ・ヘー・シーブルフが出島で亡くなった。オランダから来た報告によると、次のような家族構成となっている。

父コルネリス・ヨハネス・シーブルフ（一八〇一年六月一日、ハーレム生まれ、商人、一八五一年四月二十八日没）

母 コンスタンス・デウ・クレルク (一七九六年三月二十五日、アールスト生まれ)

妹 (長女) ウェルヘルミナ (一八二八年十一月二十六日生まれ)

弟 (次男) ジョン (一八三〇年四月十四日生まれ)

妹 (二女) スーザン・ウェルヘルミナ (一八三三年九月十一日生まれ)

妹 (三女) テレーサ・コリナー (一八三六年三月二十日生まれ)

出島で亡くなった海軍大尉のフルネームはニコラス・シャルル・シーブルフ (Nicolas Charles Sieburgh) といわれ、かれは長男であった。生まれた家はケイゼルスフラフト二百四十番地 (現在の三百一番地) であるが、現存しないとのことである。現在シーブルフ一族の子孫がアムステルダムに三人いて、うち一人は先祖が長崎で死んだことを「知っている」とのことであった。

シーブルフ海軍大尉の墓は現存し、碑文もなんとか判読できる。

Hier Rust

N. C. SIEBURGH

IN LEVENT

OUD LUTTENANTJ TER ZEE

KONINKLIJKE-NEDERLANDSCHE-MARINE

GEBOREN

AMSTERDAM

DEN 18 OCTOBER 1827

OVERLEDEN

Decima

DEN 27 JUNIJ 1862

エム・ヘー・シーブルフ、ここに眠る。生前、オランダ海軍大尉であつた。一八二七年十月十八日アムステルダムで生まれ、一八六二年六月二十七日出島で死去。



N. C. シープルフ海軍大尉の墓  
(筆者撮影)

一八六四年四月九日(元治元年三月四日)、水夫フイリプス・ブラークス(Philippus Braack)は長崎の錨地で死んだ。その墓は現存するが、今や碑文は半分以上磨滅し、判読できない。戦前に板沢教授が写したものを転載しておく。

HIER RUST

PHILIPPUS BRAACK

IN LEVEN

Matroos 3<sup>o</sup> Klasse

ANN BOORD

VAN Z. M. STOOM CORVET

MEDUSA

GEBORDEN TE ROTTERDAM

DEN 2 DECEMBER 1841

OVERLEDEN TE NAGASAKI

DEN 9 APRIL 1864

フィリップス・ブラークス、ここに眠る。生前、蒸気コルベット艦「メデュサ」号の三等水兵であった。一八四一年十二月二日、ロッテルダムに生まれ、一八六四年四月九日長崎で死去。

一八六八年五月十三日（明治元年四月二十一日）、バルテレメウス・シンデルン（Barthelemeus Sinderen）は二十七歳を一期に長崎で亡くなった。人物については不明だが、船乗りであろうか。碑文はかなり磨滅していて、完全に読みとることはむずかしい。が、墓は現存する。

BARTHELEMEUS SINDEREN

OUD 27 JAAR

Overleden 13 Mei 1868

バルテレメウス・シンデレン、二十七歳。一八六八年五月十三日死去。

翌一八六九年二月二十一日(明治二年一月十一日)、ヤコブ・ファン・ザメレン (Jacob van Zameren) は長崎で逝った。

ファン・ザメレンは商店経営者で、出島の八区画(百三坪)に住んでいた。<sup>(29)</sup>

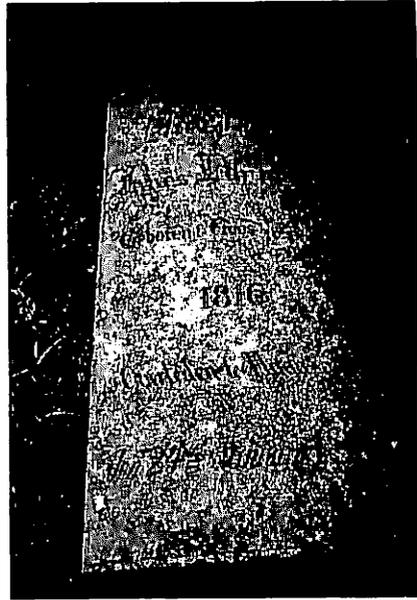
JACOB VAN ZAMEREN

OULD 46 JAAR

overleden 21 Februarij 1869

ヤコブ・ファン・ザメレン、四十六歳。一八六九年二月二十一日死去。

一八七〇年一月二十四日(明治二年十二月四日)、ジェームズ・レインバウト (James Rhyndaud) が長崎で逝った。「外国商館とその居住者一覽表および長崎の居留地の見取図」(List of foreign hongrs and residents and plan of the foreign concessions at Nagasaki, 1867) に、氏名が乗っているが、職業は記されていない。貿易商であったものか。墓は稲佐のオランダ人墓地内にあるが、興味を引かれるのは、墓を建てたのは、よしみを結んだ「大藤屋」の



遊女ハッ橋が建てたジェイムス・  
レインバウトの墓（筆者撮影）

遊女ハッ橋であった。墓碑の横の部分に「明治三年二月十三日（……）ハッ橋之を建つ」とある。日ごろのひいきと情愛から、愛人のために身銭を切つて建てたものであらう。遊女ハッ橋のこまやかな愛情を垣間見る思いがする。

Hier Rust  
James Rhyndoud  
Geboren te Goes in Zeeland  
1816  
Overleden te Nagasaki

den 24<sup>e</sup> January 1870

ジェイムス・レインバウト、ここに眠る。一八一六年ゼーラント州フースに生まれ、一八七〇年一月二十四日長崎にて死去。  
一八七七年（明治十年）七月十二日（？）、エー・イエー・ヴォルテルス（E. J. Wolters）が長崎で亡くなった。  
人物については不詳。墓碑は大浦の外人墓地にあるが、碑文（蘭英混交文）は一部磨滅している。

HIER RUST

E. J. WOLTERS

Native of Holland

Provincz Groningen

died on the 12a Ju (.....) 1877

(?)

aged 47 Jaren

ERECTED BY FRIENDS

IN

建つ。  
エー・イエー・ヴォルテルス、ここに眠る。一八七七年七月(?) 十二日(?) 死去。享年四十七歳。長崎の友人がこれを

授であつたものか、不詳。  
一八八三年(明治十六年)四月十一日、医師セー・フォック(C. Fock)は長崎で逝つた。当人は長崎医学学校の教

HIER RUST

D. C. FOCK

GEB TE UTRECHT 21 SEPT 1845

[?]

GEST TE NAGASAKI 11 APRIL 1883

[?] [?]

In leven [.....] Geneesheer

NAGASAKI [.....]

セー・フォックス医師ここに眠る。一八四五年九月二十一日(?) ユトレヒトに生まれ、一八八三年四月十一日(?) 長崎で死去。生前、長崎(註)の医師であつた。

一八八五年(?) (明治十八年)、セラルドゥス・ファン・デル・フリース (Cerardus van der Vlies) という蘭人が長崎で亡くなっている。当人については不詳。碑文も相当磨滅している。墓碑は大浦の外人墓地にある。

+

HIER RUST

CERARDUS VAN DER VLIËS

[.....]

OULD 51

1885

[?]

ゼラルドウス・ファン・デル・フリース、ここに眠る。一八八五年死去。享年五十一歳。

一八八六年(明治十九年)三月十七日(?)ヘリット・バッテケイ(Gerrit Battekei)という蘭人が長崎で死亡、  
当人についてはつまびらかにしない。碑文も一部、文字が磨滅している。

HIER RUST

GERRIT BATTEKEI

GEBOREN TE BRESKENS PRO [.....]

ZEELAND

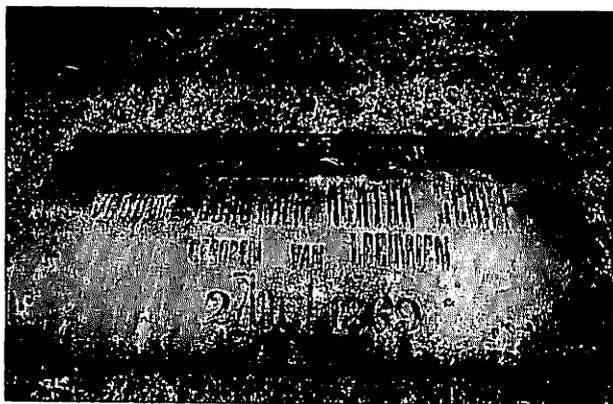
23 SEPTEMBER 1840

[?]

OVERLEDEN 17 MAART 1886

[?]

ヘリット・バッテケイ、ここに眠る。一八四〇年九月二十三日(?)ゼーラント州ブレスケンスに生まれ、一八八六年三月  
十七日(?)死去。



D. A. シフ夫人の墓 (筆者撮影)

一八六九年四月二日(明治二年二十一日)、出島十三区のアドリアン商会(Adrian & Co)の事務員<sup>(註)</sup>ハー・シフ(H. Schiff)の妻ドロテア・アハタ・シフ(Dorothea Agatha Schiff)は逝った。墓碑は大浦の外人墓地にある。

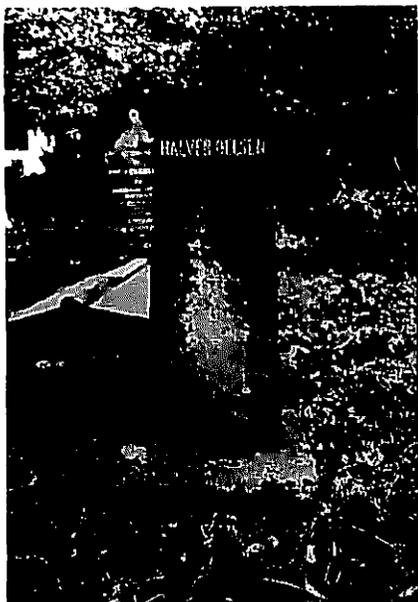
HIER  
RUST  
VROWE DOROTHEA AGATHA SCHIFF  
GEBOREN VAN LEEUWEN  
2 April 1869

ドロテア・アハタ・シフ夫人、ここに眠る。レーウエン生まれ。一八六九年四月二日死去。

横浜の外人墓地内の、フォスとテツケル両船長の墓のそばに、ハルフエル・オエルセン(Halver Oelsen)という名の水夫の墓碑がある。刻字はほとんど判読できないほど磨滅している。建てた年代は一八六〇年代ではないかと思われる。

HALVER OELSEN  
IN [.....] MATROOS  
[.....] Z. M.  
S [.....] SCHIP  
OVERL [.....]  
TER REDE D [.....] YOKOHAMA

オランダ海軍の「？」艦に乗っていた水夫ハルフェル・オエルセン、横浜の停泊地で死去。



水夫ハルフェル・オエルセンの墓  
(筆者撮影)

本稿は「日本におけるオランダ人墓」と大きなテーマを掲げているので、当然、日本国内に散らばる蘭人の墓とそこに眠るオランダ人について細大もらさず説かねばならぬのであるが、紙幅の都合でかなりの部分を削除せねばならなかった。埋葬されたオランダ人について詳述すれば、優に一冊の単行本にもなるのである。本稿で取り上げたものは十七世紀から十九世紀中葉、明治二十年代あたりまでで、筆者の興味のも中心も幕末から維新期に

\*



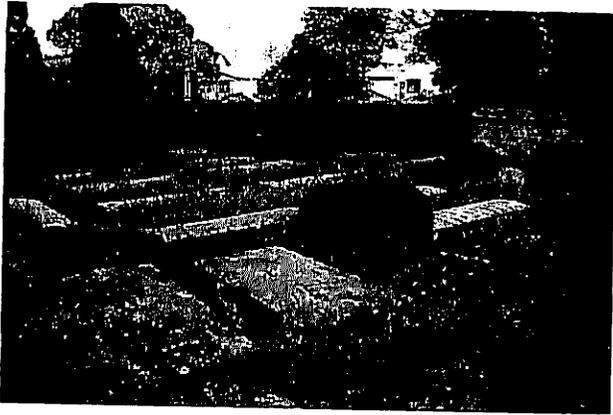
悟真寺のオランダ人墓地入口（筆者撮影）

あるので、今世紀まで説くに至らなかった。大体、年代順に筆を進め、途中で多少、閑話をはさんだ所もある。かねてより蘭人の墓について興味を抱き今日に至ったが、ようやく不完全ながらも概要を書き終え、今やつと溜飲を下げる事ができた。

ベンを欄くに当って、日本各地に葬られている蘭人の数と埋葬地について略述しておく。平戸商館時代（一六〇九年～一六四〇年）にどれほどオランダ人が亡くなり埋葬（陸上埋葬・水葬）されたかについては、実体をつかむことができなかった。おそらく一年に数名死んだと

しても、約三十年間に百名ほど亡くなった勘定になろうか。

蘭館が長崎出島に移転したのは一六四一年六月であるが、死者を陸上に埋葬できるようになったのは既述のとおり、一六五六年以後のことである。しかし、その後三十年間は墓標を設けることができず、悟真寺裏の蘭人墓地は無縁墓地と同じであったと考えられる。日本に商館長として赴任する途中、船上で亡くなったデュルコープを稲佐に埋葬し、立派な墓を建てたが、これをもってオランダ人の墓標設置の嚆矢と考えたい。おそらく、かれ以前の時代に亡くなった者は埋葬されたとき、木の十字架を立てることを許されるはずはなく、せいぜい何かの目じるしに、小さな石でも埋葬場所に置いたことであろう。



悟真寺のオランダ人墓地内部（筆者撮影）

悟真寺の今の「オランダ人墓地」(Hollandsche Begräfnisarts)に在る墓碑の総数は四十一基である。同墓地にはロシア人の墓が四基、イギリス人の墓が三基、黒人のものと云われる墓が十一基、オランダ人の墓が二十三基ある。オランダ人の墓で一番新しいものは、ジェイムズ・レインバウト(一八七〇年一月没)のものである。陸上埋葬が許可された一六五六年(明暦二年)から一八七〇年(明治三年)までの約二百十余年の間に、悟真寺の蘭人墓地に葬られたオランダ人(黒人も含む)の数は優に五百四十名余にもなるのである。主に蘭館日誌から死者を拾い出した数がこれであるが、筆者が見落した分や日誌の記録係が書かなかつた分まで含めると、六百名を越すのではなからうか。じつさい筆者は、日誌中の死亡者名と関連記事を筆写し、それをあとで数えてみて、愕然とした。現在あるオランダ人墓地の規模は三百坪位のものであろう。この敷地内に、これほど大勢の人間が葬られたと想像することはむずかしい。江戸時代の同墓地の地積については、史料がないので何ともいえない。もつとも今の地所内だけに埋葬されたわけでもなさそうで、フィッセルの『日本風俗備考』(庄司三男訳)にも「オランダ人の墓の多くは、大体においてはなればなれになつてゐるのではなく、むしろ近くにまとまつてゐるが、しかし日本人の

墓の間にまじっているものもある」(Men vindt wel de meeste onzer graven niet ver van elkander, maar toch tusschen Japansche vermenngd, ……)とあるように、江戸中期ごろは、日本人墓地に分散していたとも考えられる。

大浦川上町外国人墓地には、オランダ人の墓が五基あり、一番古いものはドロテア・アハタ・シフ夫人(一八六九年四月没)のもので、新しい墓はヘリット・バツテケイ(一八八六年三月没)のものである。浦上坂本町にも外国人墓地があり、ここに眠るオランダ人の墓は全部で六基である。一番古いものはヘー・ウエー・パールマン(一九一七年七月没)の墓で、新しいものはセ・エフ・ビレ(一九三四年十月没)の墓碑である。総じて大浦・浦上の蘭人墓は新しい。

神戸市郊外の修法ガ原の一角にも外人墓地があり、ここに五十一名のオランダ人(日本人妻を含む)が眠っている。最古の墓はヘンドリック・ヨハネス・フレイ(一八七二年二月没)のもので、新しいものとしてはマベル・アイリオン(一九八二年十月没)の墓がある。横浜の外人墓地には四十五名のオランダ人(日本人妻をも含む)が葬られており、デッケルとフォス(一八六〇年二月没)両船長の墓が一番古く、新しいものは一九六二年に亡くなったヘンドリック・ド・ラートのものである。神戸・横浜のオランダ人の墓の多くは、維新前後から今日に至るものが大半で比較的新しい墓ばかりである。

東京の青山墓地の一角にも外人墓地がある。ここに長崎で生後間もない愛娘を亡くしたフェルベック夫妻の墓がある。墓の位置は南一種イ六側。碑文は次のようになっている。

GUIDO FRIDOLIN

VERBEEK

MARIA VERBEEK

1840-1911

グッド・フリドリッ・フェルベークの靈に献ぐ、妻マリア・フェルベーク（一八四〇〜一九一一）。

函館の船見の丘にも外人墓地があるが、ここの元監理人関川建蔵氏に照会の手紙を出したところ、蘭人の墓はないとの回答を得た。

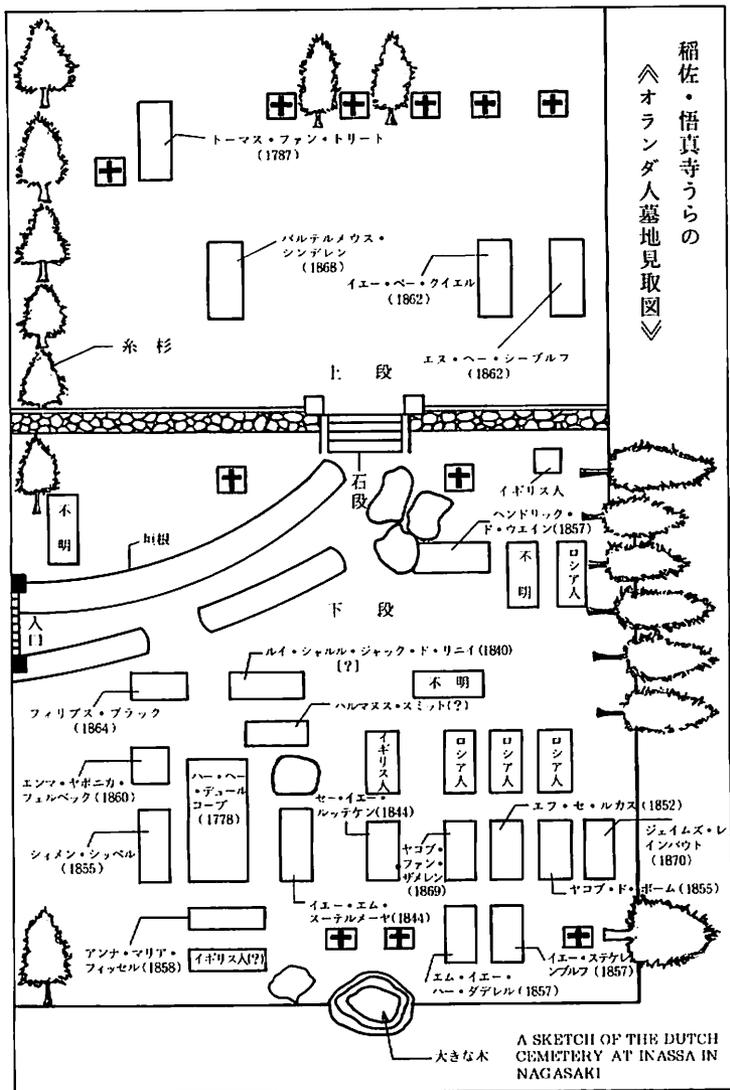
こうして日本各地に散らばるオランダ人の墓を瞥見してみると、稲佐のオランダ人墓地が古い墓碑をいちばん多く持っていることがわかるし、歴史学徒にとつて、ここは江戸時代に日本にやってきて、はかない最後を遂げたオランダ人の生きざまと心情を考えさせてくれるまたとない場所でもある。江戸時代を通じて、この墓地は垣根も塀もなく、ただ低い石垣をめぐるしただけである。だから誰でも自由に墓地内に入り、墓碑を見、あたりの景観もたのしむことができたことであろう。

現存のオランダ人墓地は、四方を赤レンガの塀で囲まれ、その三方は日本人墓地とロシア人墓地、中国人墓地となっている。太平洋戦争が始まるまでは、

——鉄の扉があり、厳重に閉ざされ、墓地一面にはコスモスの花が咲き乱れていた。戦時中に鉄扉は回収され、戦後はひどく荒廃していた。

稲佐・悟真寺うらの

〓オランダ人墓地見取図〓



A SKETCH OF THE DUTCH CEMETERY AT INASSA IN NAGASAKI

と、松尾利信氏は「稲佐オランダ墓地」(『長崎談叢』第四十一号)の中で語っている。

戦中、戦後の一時期、墓地は、

——雑草茫茫として荒れほうだい。

であつたが、時折、孫をつれた名も知らぬ老婆がせつせと除草していたという。孫たちを墓地内で遊ばせてもらうので、せめてものお礼の気持から草むしりをしていたものだが、あながちそうとはかぎらないのである。

老婆の行為には普遍的な人間愛、不幸にして異国で逝つた他国民への思いやり、哀憐の情が感じられ、筆者はこのエピソードに深い感銘をうけた。……

筆者は長崎に赴くたびに、「オランダ人墓地」を訪れることをたのしみにした。オランダ語の単語が少しずつわかるようになるると、碑文の中に蘭人の人生を読み取り、そのせつない思いをくみ取ろうとした。飽かずに眺めた碑文の数々……フィッセルをして『フライエグラーフゼン』と云わしめた墓石の中には、見事な刻字もあつて、それらはもう立派な芸術品なのである。オランダ人が死んだ同胞のために憐憫と渾身の力をこめて描いた一枚の下絵をもとに、日本のすぐれた石工が忠実にそれを刻んだものと思われる。

だが、碑文は早晩磨滅して読めなくなること必定である。堅い材質のものは別にして、古い墓石は火成岩の一種を使つておるため、塩風に弱く、刻字は霜柱が立つたように浮き上がり、そのうちに除々に風化してゆくのである。だから今のうちに精細な、しかも写真をできるだけ沢山入れた研究論文を作っておくことが肝要であり、本稿を執筆した筆者の動機の一つもこの点にある。

本稿の結びとして、一六二一年から一九八二年までの約三百六十年間に、日本で死去し、埋葬(水葬をも含む)さ

れたオランダ人の一覽表を添える。この中にはオランダ以外の国籍の者（ドイツ人・スウェーデン人・デンマーク人・ジャワ人等）も大勢含まれるが、一応オランダ人として取り扱った。氏名は、蘭館日誌を中心に拾ったが、長崎県史編纂室作成の「長崎市大浦、稲佐、浦上国際墓地。オランダ人墓の名称、所在一覽」（英文）、悟真寺住職木津義彰氏作成の「稲佐悟真寺の蘭人墓のリスト」（英文）、修法カ原外人墓地監理事務所作成の「死亡オランダ人一覽表」（英文）、横浜外人墓地監理事務所の安藤寅三氏作成の「死亡オランダ人一覽表」（英文）その他を利用していただいた。が、幕末までの氏名一覽表は、筆者が蘭館日誌を一枚ずつめくって拾い出して作成したものである。旧帝國学士院所蔵の蘭館日誌（計一三九冊欠落も多い）を利用したが、一六三一年から四一年までの複写<sup>フォトリソグラフ</sup>写真の分——これは東京大学史料編纂所から「オランダ商館長日記」と題して原文・訳文編が刊行されている——は、草書体の判読に自信がもてぬため閲読せず、邦訳を利用した。また筆者が調べた一六四一年以後の分も見落しが多い上に、誤記も多々あることと思われる。日本学士院所蔵の筆写本は、大勢のオランダ人の手をわずらわさせてハーグの古文書館にある原本を写し取ったもので、字体が一定せず、中には実に判読に苦しむものもある。従って判読に自信がなかったものは（？）としておいた。

本稿の筆を起すまで、資料集めと実地調査、蘭館日誌の閲読等にかかなりの時間を費やしたが、とりわけ蘭館日誌の閲読と部分的筆写には多くの労力を犠牲とした。最後に執筆に至る過程で多くの方々の協力を得たが、宇久町役場の住民課長田中稔と参事山田康博両氏、平戸市役所社会教育課の萩原博文氏、悟真寺住職木津義彰氏、東陽院住職斎藤直成氏、皓台寺、天然寺及び光林寺の各住職、横浜外人墓地の監理人安藤寅三氏、函館外人墓地の元監理人関川建藏氏、青山墓地監理事務所の各職員、悟真寺の蘭人墓地に眠るオランダ人とその子孫を調査していただいたアムステ

ルダムの実業家勝山光郎氏、オランダ大使館の一等書記官マリオン・ペンニクテーイスリング氏、J・A・ピニン  
グトン氏、ハーグの古文書館のファン・アンローイ及びファン・ホーフ女史、ユトレヒトの古文書館のA・ピーーテ  
ルスマ氏、十七、八世紀の蘭語について教示を得た庄司三男先生、また文献史料面では、長崎県立図書館、アムステ  
ルダムの海事博物館、横浜開港資料館、東京大学史料編纂所、東洋文庫、日本学士院、法大・早大の各図書館等の  
世話になりました、記して感謝を表します。

(一九八八・八・三〇)

(追記) 本稿には身分的差別や軽蔑的なことが多少出てくるが、原文尊重の建て前からそのままにし、ここに他意ないこ  
とを明記しておく。

### 注

- (1) 板沢武雄著「日蘭貿易史」四頁。
- (2) 松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集」には、リーフデ号の生存者二十五名中、「うちの二人は到着  
すると間もなく死亡した」とある。
- (3) 永積・武田共著「平戸オランダ商館・イギリス商館日記」の一五頁。
- (4) 平戸市教育委員会編「平戸市内キリシタン遺跡詳細分布調査報告書」の一八頁。
- (5) 永積洋子訳「平戸オランダ商館の日記」(第一号)の一五頁。
- (6) 前掲書(第二号)の五二〇頁。
- (7) 同右(第四号)の二二七頁。

- (8) 注(7)の三二〇頁。
- (9) Japan Dagregister に “ergens op een eylande ken” とある。
- (10) C. T. van A. de Coningh 著 *Mijn Verlijf in Japan* (1856) の一四〇〜一四二頁。
- (11) Engelbert Kaempfer 著 *The History of Japan* (一九〇六) の二卷一九七頁。
- (12) *The Deshima Dagregisters their original tables of contents vol. 1* の三六頁。
- (13) Charles-Pierre Thunberg 著 *Voyage en Afrique et en Asie, principalement au Japon* (1794) の一八〇〜一八一頁。
- (14) 註釋附録「日本風俗備考2」(東洋文庫)の一九〇〜一九二頁。
- (15) 庄司三男「元禄宝永前後における長崎の唐人およびオランダ人と仏寺との関係について」(『日本仏教』第二十五号所収、二二頁)。
- (16) 「通航一覽」(卷二四一)に「往年江戸にて死せし時は浅草磯多村……」とある。
- (17) 注(1)の一三二頁。
- (18) *Japan Dagregister* (二七七・八・九)に *lyk in een loode kist* ……とある。
- (19) 若森英雄「ゲイスベルト・ヘムミ先生」(『江戸長崎談叢』第二号所収、一二頁)。
- (20) 鈴木正鍊「天然寺蘭人の墓」(『歴史地理』第二十八卷第五号所収、五七五頁)。
- (21) 注(19)に同じ。
- (22) 注(1)の八二頁。
- (23) 「横浜ニ於テ蘭人二名遭害扶助金附与一件」(『横浜市史 資料編6』所収)を参照。
- (24) 「ザ・タイムズ」*The Times* 紙に、蘭人船長殺害に関するくだりがある。一八六〇年六月三十日付の同紙の九頁に、

Japan.—(前文省略) In January his Japanese linguist (通弁伝吉のこと——引用者) had been assassinated in

the daytime, close to the gateway of the embassy, and he felt that he must "trust in Providence, and take his chance."

In March two Dutchmen, masters of merchant vessels, were hacked to pieces in the public streets;

またシモン・R・ノラット著 Young Japan. Yokohama and Yedo (1880) にも似たような記事がある。

On the 25th February, about 8 P. M., two Dutch captains of vessels in harbour were cut down in the Main street of Yokohama.

- (25) 沼田・荒瀬共訳「ボニン日本滞在見聞記」(雄松館)の154頁。
- (26) Archieven van De Gezantschappen en Consulaten betreffende Japan Anno. 1860 中の記事「東京大学史料編纂所蔵のメインストリート」。
- (27) 一八六一年六月七日付、ハリス宛の久世大和守・安藤対馬守書簡(蘭文の英訳)。「横浜開港資料館蔵」。
- (28) 右に同じ。
- (29) List of foreign hongs and residents and plan of the foreign concessions at Nagasaki 1867. を参照。
- (30) セ・フォットン医師のフルネーム及び家族構成は次のようになっている。かれは七人兄弟の長男であった。

Cornelis Hendrikus Mathews Fock was born in Utrecht on September 21, 1845 as a son of Hubertus Cornelis Antonius Leopoldus Fock, "Medicinae Doctor", and Adriana Maria Achterbergh.

His brothers and sisters were :

Catharina Jacoba Maria Johanna, born in Utrecht on November 25, 1836.

日本におけるオランダ人墓

- Eleonora Cunera Maria Adriana, born in Utrecht on September 12, 1838.  
Wilhelmina Clarina, born in Utrecht on September 24, 1840.  
Ida, born in Utrecht on April 26, 1843.  
Leonardus Josephus Gabriel, born in Utrecht on March 24, 1848.  
Johannes Hendrikus Maria, born in Utrecht on January 17, 1851.  
Carolina Josephina Theodora Maria, born in Utrecht on March 4, 1856.

Cornelis Hendrikus Matheus Fock moved to the village of Vleuten (Province Utrecht) on the 14 th of May 1873. He was unmarried at that moment.

[Drs. A. Pietersma 〇譯如2449]

(5) The Chronicle & Directory for China, Japan, & the Philippines, for the year 1869. 〇 | | 尺風と参歴。

参歴参衆文藝

- Japan Dagregister (1841~1860)  
Charles-Pierre Thumberg : Voyage en Afrique et en Asie principalement au Japon, pendant les années 1770-1779. Chez Fuchs, Libraire Paris, 1794.  
J. F. van Overmeer Fisscher : Bijdrage tot de kennis van het Japansche Rijk. J. Müller & Comp. Amsterdam, 1833.  
Engelbert Kaemper, M. D : The History of Japan, vol II, James MacLehose and Sons, Glasgow, 1906.  
C. T. van Assendelft de Coningh : Mijn Verblijf in Japan, Gebroeders Kraay, Amsterdam, 1856.

- Le Comte de Lijnden : Souvenir du Japon, La Haye, C. W. Meining, 1860.
- Pompe van Meerdervoort : Vijf Jaren in Japan, Firma van der Heuvel & van Santen, Leiden, 1867.
- John R. Black : Young Japan, Yokohama and Yedo, Trubner & Co, London, 1880.
- W. J. C. Huyssen de Kattendyke : Le Japon en 1857, Libraire Fischbacher, Paris, 1924.
- M. Paske-Smith : Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, Paragon Book Reprint Corp, New York, 1968.
- The Chronicle & Directory for China, Japan, & The Philippines, to the year 1869. Daily Press Office, London.
- The Times, Saturday, June 30, 1860.
- M. P. H. Roessingh : Het Archief van de Nederlandse Factory in Japan 1609-1860, 's Gravenhage, 1964.
- A. C. J. Vermeulen : The Desima Dagregisters their original tables of contents, vol. I, No. 6 Intercontinenta, Leiden 1986.
- ibid.*, vol. II, No. 8 1987.
- List of Nederlandse Gravesstones in Oura, Inasa, Utrakami Foreigners cemetery.
- 「長崎市大浦・稲佐・浦上国際墓地」オランダ人墓の名称・所在「一覧」(長崎県立図書館蔵)
- The List of Nederlandse Gravestone In Inasa Goshinji International Foreigner's Cemetery by most Rev. G. Kizu.
- List of the dead in Shuhogahara Cemetery, Kobe.
- 「横浜外人墓地の蘭人一覧表」(監理人安藤氏作成のリストは氏名・没年(西暦)・墓の位置のみ英文で記されており、表題は付いていないので、筆者が仮につけておいた)。
- 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料—オランダ商館長日記』(一六三三年～四一年)
- 同右『日本関係海外史料—イギリス商館長日記』(一六一五年～二二年)

- 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』（全四巻・岩波書店）  
丹羽漢吉校訂『長崎虫眼鏡・長崎聞見録・長崎縁起略』（三書合巻・長崎文献社、昭和五十年五月）  
『通航一覽』（国書刊行会、大正二年八月）  
松田毅一監訳『一六・七世紀イエズス会日本報告書』（同朋舎出版、昭和六十三年二月）  
金井 圓『江戸西洋事情』（新人物往来社、昭和六十三年二月）  
永見徳太郎『南蛮長崎草』（歴史図書社、昭和五十三年九月復刻）  
『長崎市史』（地誌編・清文堂出版、昭和四十二年八月）  
武内 博『横浜外人墓地』（山桃舎、昭和六十年十一月）  
本領  
武田万聖子『平戸オランダ商館・イギリス商館日記―碧眼のみた近世の日本と鎖国への道』（そしえて、昭和五十六年一月）  
牧野富太郎『日本植物図鑑』（北隆館、昭和十五年十月）  
森島中良  
大槻玄沢『紅毛雑話・蘭説弁惑』（八坂書房、昭和四十七年十月）  
司馬江漢『江漢西遊日記』（平凡社、昭和六十一年十月）  
情  
船  
加周編述  
村山共編『北槎聞略』（吉川弘文館、昭和四十年五月）  
『長崎古今集覧名勝図絵』（長崎文献社、昭和五十年九月）  
森永種夫校訂『長崎古今集覧』（長崎文献社、昭和四十九年二月）  
『長崎名勝図絵』（長崎文献社、昭和四十九年二月）  
小沢敏夫訳注『シヒピースのプロシヤ―日本遠征記』（奥川書房、昭和九年一月）  
幸田成友訳『日本大王國志』（東洋堂、昭和二十三年十一月）  
佐岡三男  
沼田次郎訳注『日本風俗備考』（平凡社、昭和五十三年三月）  
板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』（吉川弘文館、昭和四十四年六月）  
板沢武雄『日蘭貿易史』（平凡社、昭和二十四年四月）

- 片岡一男校訂「年番阿闍陀通詞史料」(近藤出版社、昭和五十二年九月)  
殷部臣廷  
 平戸市教育委員会編「平戸市内キリシタン遺跡詳細分布調査報告書」(昭和六十三年三月、非売品)  
 板沢武雄「悟真寺の丘」(「江戸長崎談叢」第二卷第一号)  
 若森英雄「ゲイスベルト・ヘムミ先生」(「江戸長崎談叢」第二号)  
 増田廉吉編「長崎南蛮唐紅毛史蹟」(長崎史蹟探求会、昭和二年七月)  
 松尾利信「稲佐オランダ墓地」(「長崎談叢」第四十一号)  
 木津義彰「悟真寺のオランダ墓地」(「長崎文化」第三十三号)  
 同 右 「悟真寺とその國際墓地」(「長崎文化」第四十四号)  
 庄司三男「仏寺に葬られた蘭人の一例」(「日本仏教」第十五号)  
 同 右 「元禄宝永前後における長崎の唐人およびオランダ人と仏寺との関係について」(「日本仏教」第二十五号)  
 鈴木正練「天然寺蘭人の墓」(「歴史地理」第二十八巻第五号)  
 沼田次郎「天然寺所蔵和蘭甲比丹ヘンミイ関係史料」(「歴史地理」第九十一巻・第三号)  
 大島蘭三郎「蘭館医デ・ホウトの死について」(「日本医史学雑誌」第十二巻・第二号)  
 「横浜ニ於テ蘭人二名遭難扶助金付与一件」(「横浜市史 資料編六」、有隣堂、昭和四十四年三月)  
 「ヒュースケン遭難関係地図 全」(日比谷図書館・東京大学史料編纂所蔵。ただし、東大所蔵のものは日比谷図書館所蔵のもの)の写しである。大正八年一月、藤沢竹次郎が謄写した。

## Brief Notes concerning Dutch Gravestones in Japan. — the names of Dutchmen buried in the graveyards of Japanese temples and in foreign cemeteries in Japan (A.D. 1621 — 1982).

This article deals with the Dutchmen buried in Japan and their gravestones since the establishment of the Dutch Factory in Hirado (i.e. September 20th 1609). The identity of the first Dutchman buried in Japan remains unknown. Since the Dagregister (i.e. Day Journal) of the Dutch Factory in Hirado from 1609 till 1633 is missing, it is difficult to discover which Dutchmen died in Hirado during this blank of 24 years. According to an entry in the Journal of the English Factory in Hirado dated 5th August 1617, some of the crew of a Dutch ship which had arrived in port at nearby Nagasaki died of a shortage of water and of scurvy. The dead were most probably buried at sea.

In July, 1621, a Dutchman named Jan Pietersen, who was one of the crew of an Englishship, was stabbed in the left breast with a dagger by a Englishman named John Roan who was then hanged on July 4th 1621. The remains of Jan Pietersen were presumably buried in the Christian burial place in Hirado. The cemetery was located in the mulberry fields to the North of the St. Francisco Xavier monument. It is said that many human bones were found there during the cultivation of the soil in the Meiji period.

Jochum van der Ass, the secretary of Pieter Nuijts (i.e. the Governor of Formosa), died of fever on August 12th 1627 and is supposed to be buried in the same Christian burial place.

Laurens Nuijts, the son of Pieter Nuijts, died of severe diarrhoea on December 29th 1631 at Ōmura in Nagasaki. The Dutch asked the

permission of the authorities to bury his body but in vain.

The Dutch Factory in Hirado enjoyed the ownership of an island called "Yokoshima" given by the Lord of Matsuura in Hirado. This small island was used not only as a stockfarm but also as a grave yard as well as a yard for keeping ropes and cows. A Japanese watchman named Sōbei was entrusted with the care of the island. Here on the island, an ondercoopman (i.e. under-merchant or employee) named Daniel Reijnierszoon was buried on September 2nd 1638.

The question, however, is the location of the island. There are two islands called "Yokoshima" in Hirado; one is located near Takushima island, the other is in the offing of Ōsakibana. Mention of Yokoshima occurs many times in the Dagregister of the Dutch Factory. Jan van Elserack, the opperhoofd (i.e. the chief of the Dutch Factory) and his men were on their way to Hirado after receiving the audience of Shōgun in Yeddo. They boarded a ship from Shimonoseki and made for Hirado, passing the island on March 8th 1642. The Journal of the day reads as follows :

8.d.<sup>o</sup> De wint N.N.O. Zijn vandaar't zeyl gegaen met een styve coelte, passeerden den 9<sup>n</sup> voorby Joxxima, een eylant omtrent een mijl van Firado, 't welck de Comp.<sup>e</sup> continuelijck als eygen heeft gebruyckt, haar vee daarop gehouden ende de Nederlanders op begraven zijnde een van blauwen arduyn ende diverse van ordinarie steen op gemetzelt, bevonden alle geruyneert ende geslecht te wesen. 's Middaghs quamen in Firando, alwaar met licentie aan lant op 's Comp. s. . . . .

It is hard to choose between the two Yokoshimas but the present writer and Mr. Hagiwara, a local historian employed in the City Office of Hirado, visited and investigated a "Yokoshima" located between Takushima and Hiradoshima. The uninhabited island is 1 kilometer in circumference and made up of rocks on the south side and is covered with bushes. There is a small tableland in the middle of the island.

We discovered, contrary to our expectations, the ruins of an old burial ground. It measures about 4 m. by 5 m. The grave was destroyed and the remains are merely ruins. The stones (i.e. a kind of whinstone) were scattered in all directions. The bushes of *Eurya emaroinata* grow in profusion in the middle of the grave. It is impossible to tell, however, whether the ruins indicate the burial ground used by the Dutch or not. However we conjectured that it must be the remains of the Dutch burial place. We also found four or five Japanese gravestones in the neighbourhood, but all the inscriptions were defaced. The other "Yokoshima" remains to be investigated.

Hans Andriesz, a German from Hamburg, was beheaded together with a married Japanese woman on January 14th 1640 and the remains of the German were encoffined by his colleagues and buried in Yokoshima towards the evening of the same day. He was arrested while sleeping with the Japanese woman in the December of the proceeding year.

On November 8th 1640, Inouechikugo-no-kami, who was in charge of Ōmetsuke (i.e. one of the high officials under the shōgun), and Takuue Heiwemon, the governor of Nagasaki, summoned François Caron, then the chief of the Dutch Factory in Hirado, to the residence of the Lord of Matsuura. F. Caron was suddenly ordered to shut down the Factory and to destroy the buildings of the Company as well. The names of the chronological era (i.e. 1637 & 1639) fixed on the gables of the storehouses incurred the displeasure of the Bakufu (i.e. the government under the Tokugawa Shōgunate). The Dutch Factory was ordered to move to Decima, an artificial islet in the bay of Nagasaki on June 17, 1641.

An oppermeester (i.e. senior-surgeon) died on board the flight schip "Coninghinne" which arrived in port in Hirado on August 1st 1641; the Dutchmen applied to the authorities for permission to bury the deceased on Yokoshima, but the request was turned down on the ground that the holy land of Japan should not be defiled with the dead bodies of christians. Although the Dutch had been allowed to bury

their fellow countrymen on land till then, this time they were not given permission to do so for some unknown reason. So the body of the surgeon was buried with some stones as sinkers at sea outside the port.

Two seamen died in August 27th and 29th 1641 and were buried at sea on the grounds that the bodies of christians were unworthy of burial on land. On August 10th 1642, an assistant cook was also buried at sea for the same reason.

Cornelis Janszoon, a skipper of the "Swaen", died at Decima on September 26th 1643 and was ordered to be buried at sea. When a skipper named Jan Hendrickszoon died on September 12th 1649, the Dutch asked permission to bury him some where on Decima but the petition was ignored. A sailor named Cornelis Claaszoon died on October 18th 1649 and was buried at sea.

Those who died of illness or met with untimely deaths were not buried on land but were buried at sea till the middle of the 17th century. The successive opperhoofds petitioned the Bakufu for permission to bury their fellow countrymen on land but burial at sea remained usual method of interment for a long time.

It was not until March 24th 1654, when Gabriel Happart was opperhoofd, that the Dutch were permitted to bury their fellow countrymen at a vacant place situated at the foot of Inassa yama (i. e. mountain) in Nagasaki. This land belonged to an ancient Buddhist temple called Goshinji, a branch of the Jōdo-shinshu founded by Shinran-shōnin in 1224. Later the burial ground was called "de ordinarie begraafplaats (i.e. the ordinary cemetery) or "de gewoone plaats" (i.e. the ordinary place) by the residents in Decima.

It sometimes happened that the Hollanders died from disease on thier forward and backward journeys to Yeddo to be received in audience by Shōgun. Otto Wakker, an ondercoopman and attendant of the opperhoofd Gabriel Happart, died on February 23rd 1654 and was buried in the graveyard of Asakusa-temple on 24th instant. According to the report by Mrs. M.C.J.C. van Hoof (archivist) in the

Hague, "an Otto Janszoon Wacker from Amsterdam figures in the ship's paybook of the Witte Olifant (V.O.C. 5279, page 4). This ship departed on April 6th 1646 from Texel, equipped by the Amsterdam chamber. It arrived on December 5th 1646 in Batavia. In 1651 he was an under merchant and in 1652 he was an under merchant in Japan. In Factory Japan 31 an instruction is mentioned, dated December 26th 1651 and issued by Opperhoofd Adriaan van den and Anthonij Rutgers."

Jan François de Haut, an oppermeester (i.e. upper-surgeon) died on May 17th 1768 in the suburbs of Kyoto on his way back to Nagasaki from Yeddo. His remains was cremated and buried at Shinnyo-do, Tōyoin-temple in Kyoto on May 20th 1768. His death is registered in the "kakocho" (i.e. necrology) of the temple, though the gravestone is no longer in existence.

Hendrik Gottfried Duurkoop, an oppercoopman (i.e. senior employee) of the Dutch East Indies' Company, died on board the ship "Huis te Spijk" on July 27th 1778 on his way to Japan from Batavia. His remains were buried at Inassa on August 15th 1778. The tombstone of H.G. Duurkoop is not only the oldest one in existence in Japan but it is the largest in size. The stone measures 2 meters 78 cm. in length and 1 meter 15 cm. in width. The grave was covered with a wooden roof in those days. Many Japanese scholars and men of letters visited this stone in the Edo period and later they recorded their experiences in books.

As regards the life of H.G. Duurkoop, Mrs. van Hoof reports as follows; "The Governor-General and his Council appointed him warehouse-keeper on June 9th 1773. In June 1773 he figures in the musterroll as under merchant, but at the end of 1773 he travelled to Batavia on board the Geinwens as merchant and warehouse-keeper. At the end of 1774 he was back in Japan; he owned 5 slaves. The Governor-General and his Council nominated him as merchant on December 30th 1774. In 1775 he stood again in for Armenault during his journey to Yeddo. In June 1775 he figured as a merchant and at the

end of 1775 he travelled to Batavia on board the *Stavenisse*. The Governor-General and his Council nominated him on April 2nd 1776 as opperhoofd with the usual rank and title of chief merchant. At the end of 1776 he figured in the musterroll as chief merchant and opperhoofd. On November 13th 1777 opperhoofd Durkoop travelled to Batavia on board the *Zeeduin* (Factory Japan 44). He returned to Japan on board the *Huis te Spijk*. This ship departed on June 17th 1778 from Batavia and arrived on August 9th 1778 in Decima. Durkoop died on board of the ship on July 27th 1778 (Factory Japan 45 and 188). On March 12th 1781 the V.O.C. did a last payment to G. la Borde as proxy of Jan Andries Durkoop, brother and heir of Hendrik Godfried. During one of his journeys to Batavia he made his last will and testament, namely on June 18th 1772 in front of notary Johannes van den Bergh. He was unmarried and had no children, therefore he designated as his sole heir his brother Jan Andries Durkoop, ex-lieutenant of the life-guard of the Governor-General. He requested his brother to give to his sister Else Dorothea Durkoop and her two children Hendrik Andreas and Lucia Carolina Ulps, to his half brother Gerard Hendrik Durkoop and to his nephews and nieces—the children of this brother or brothers—Hendrik Jacob, Simon Coenraad, Lucia Dorethea and Johanna Christina Durkoop a generous souvenir out of the estate, if necessary in ready money. Jan Andries became also executor of the will. The testator attested that his estate amounts less than 2000 rixdollars (V.O.C. 6874, no. 6201)."

Thomas van Triet, a captain of the "*Roosenburg*" died of illness in Nagasaki on October 16th 1787 and was buried at Inassa two days after his death. His gravestone exists and it is the second oldest one in existence.

Mrs van Hoof informed me of the past career of van Triet as follows; "Thomas van Triet from Rotterdam travelled to the Indies as a lieutenant on board the *Rozenburg*. This schip departed on June 3rd 1786 from Goeree, equipped by the Delft chamber. It arrived January 24th 1787 in Batavia (V.O.C. 14064, page 4). The master

Hendrik de Lange died on July 20th 1786 and during the stay of the ship at the Cape of Good Hope from September 18th 1786 till October 24th 1786 Thomas van Triet was appointed master of the Rozenburg by the government of the Cape on October 10th 1786, on approbation of Batavia. On June 9th 1787 he appeared before notary Nicolaas van Bergen van der Grijp in Batavia in order to make a procuration in the form of a codicil ("codicilaire procuratie"). He designated two assignees and appointed as executors of his monthly pays the directors of the Delft chamber, the chamber for which he sailed out (V.O.C. 6861 no. 4053)."

Gysbert Hemmy, an opperhoofd of the Dutch Factory in Nagasaki, died on June 9th 1798 on his way back to Nagasaki from Yeddo and was buried in the graveyard of Tennenji-temple in Kakegawa city, Shizuoka prefecture. His gravestone was long forgotten and ignored until 1922 when Her Imperial Majesty was pleased to visit the grave in the company of Pro. Dr. Izuru Shinmura (1876-1967) of Kyoto Imperial University. In April 1923, Dr. J. Fenstra Kuiper, then the 1st secretary and interpreter of the Dutch Legation in Tokyo, visited the grave and examined ancient documents regarding G. Hemmy. Later, both the Japanese and the Dutch erected a monument to the memory of the Mr. G. Hemmy in the Taisho period.

Jan Frederik Feilke (1780-1814), an oppermeester of the Dutch Factory who had many Japanese friends and instructed the Shōgun's doctors in medicine, died on July 28th 1814. The Japanese interpreter recorded his death in his memorandum (i.e. Yorozu-kicho) but his stone does not exist at Inassa.

Hermanus Smit, whose career is unknown, died at Decima on August 15th 1821.

Doeff Jōkichi or Michitomi Jōkichi, an illegitimate child of opperhoofd Hendrik Doeff (who stayed in Japan from 1803 till 1817), died at the age of 17 on February 18th 1824. He was buried in the graveyard of Kōtaiji-temple in Nagasaki.

J.M. Zoetermeer, 1st officer on board H.N.M.S. frigate "Palem-

bang”, died at Decima on September 1844. C.T. Roetteken, military surgeon on board H.N.M.S. frigate “Palembang” died in the roadstead of Nagasaki on October 27th 1844. Both his stone as well as record of him are in existence.

The Dutchmen whose tombstones exist in the Dutch Cemetery at Inassa, Nagasaki are as follows ; F.C. Lucas, 2nd class employee of the Dutch Factory in Japan, born in Rotterdam on October 26th 1827, died at Decima October 11, 1852.

Sijmen Schipper, 1st engineer of Z.M. steamship “Gedeh”, died on August 11 1855.

Jacob de Boom, sailor of the 2nd class on board Z.M. steamship “Gedeh”, died on August 4th 1855. His name can be found in the necrology of Goshinji-temple.

Louis Charles Jacques de Ligny, died in Decima on August 3rd 1840. His stone exists but is illegible.

Hendrik de Wijn, captain of the Dutch merchantman, died on board the ship “Willemina en Klara” on his way to Nagasaki from Batavia on January 8th 1857.

M.J.H. Dadeler, sailor of 1st class in the Dutch Navy, died at Decima on December 6th 1857 and about a week later another 1st class sailor named S. Stekelen died in Decima on the 12th of December 1857.

Anna Maria Fischer, wife of Dutch merchant J.A.C. Gerlach, died in Decima at the age of 22 after being rescued from the wrecked ship “Cassandra”.

Emma Japonica Verbeck, the one-week-old baby of a missionary and English teacher, Guido Herman Fridolin Verbeck (1830-1898), died on February 2nd 1860.

The two Dutch skippers, Wessel de Vos and Nanning Dekker were hacked to pieces while shopping in Yokohama on February 26th 1860.

Henricus Coenradus Yoannes Heusken (1832-1861), secretary and interpreter of Townsend Harris, the U.S Minister to Japan, was

killed by several rōnins (i.e. lordless swordsmen) on his way to the American Legation (i.e. Zenpukuji-temple) at Azabu from the Prussian Legation on the night of 15th January 1861. He was buried at Kōrinji-temple at Azabu. There is no mention of his death and burial in the necrology of the temple but the remains of his tombstone built by Townsent Harris survive.

J.P. Cuyler, in charge of supplies on board a Dutch steamer, died in Decima on July 7th 1862. N.C. Sieburg, retired lieutenant in the Royal Dutch Navy, born in Amsterdam on October 18th 1827, died at Decima on June 27th 1862.

Philippus Braacx, sailor of the 3rd class on board H.M. steamer corvette "Medusa", born in Rotterdam, died in Nagasaki on April 9th 1864. The tombstone exists but is illegible.

Balthemeus Sinderen, died at the age of 27 on May 13th 1868. Jacob van Zameren, died at the age of 46 on February 21st 1869.

James Rhijnboud, born in Goes in Zeeland in 1816, died in Nagasaki on January 24th 1870. The tombstone was erected by a courtesan named Yatsunashi of the House Ofujiya (i.e. brothel) on the 13th of the Meiji 3 (1870).

In the Ōmura foreign cemetery in Nagasaki we find the following older tombstones from the late 19th century.

E.J. Wolter, native of Holland, died in Nagasaki in 1883. The stone exists but is partly illegible. Crardus van der Vlies, who is unknown, died in Nagasaki in 1885.

Gerrit Battekej, born in Zeeland in 1840, died in Nagasaki on March 17th 1886. Dorothea Schiff, wife of H. Schiff employed by Adrian & Co. at Decima, died on April 2nd 1869.

In an investigation of the English Day Journal and Japan Da-gregister (Anno. 1649-1860), the present writer discovered that more than 540 Dutchmen (including Javanese & some people of mixed parentage) were buried not only in the Dutch cemetery but also in the Japanese graveyards of Goshinji and Kōtaiji temples. But strange to say only 23 stones exist in the Dutch cemetery of Goshinji-temple.

We also have a foreign cemetery at Ōura in Nagasaki, where 5 Dutchmen were buried. The two cemeteries at Ōura and Ōmura in Nagasaki are comparatively new ones and the stones there are new as well.

There is also a foreign cemetery at Shuhōgahara in Kobe where 45 Dutchmen and women are buried. The oldest stone shows that it was erected in 1872. The largest foreign cemetery in Japan, needless to say, is in Yokohama, where we find 45 Dutchmen and women are buried. There is also a foreign cemetery in Hakodate on Hokkaido Island but no Dutchmen are buried there. At Aoyama in Tokyo there is a small foreign cemetery where Mr & Mrs Verbeck rest in peace.

In conclusion, I should like to express my deep indebtedness to many people who have helped me in my studies for their various kindnesses. This paper is dedicated to the memory of many unknown Dutchmen and Javanese who were so unfortunate as to die in Japan far away from their homelands.

Aug. 30. 1988.

Takashi Miyanaga, Tokyo.

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Jan Pietersen	sailor			1621·7·7	foreign cemetery in Hirado
Leonard Campus				1623·11·21	?
Jochum van der Ass	Secretazy			1627·8·12	?
Laurens Nuijts				1631·12·29	buried at sea (?)
Daniel Reijniersz				1638·9·2	Yokoshima
Hans Andriesz	assistant steward	Hamburg		1640·1·14	"
<i>unknown</i>	1 <sup>st</sup> surgeon			1641·8·1	?
<i>unknown</i>	sailor			1641·8·27	buried at sea
<i>unknown</i>	sailor			1641·8·29	"
<i>unknown</i>	assistant steward			1642·5·10	"
Cornelis Jansz	skipper			1643·9·26	"
Jan Hendricksz	skipper			1649·9·12	"
Cornelis Claasz		Warmond		1649·10·18	Goshinji-temple
Otto Wacker	under-merchant			1654·2·23	Asakusa-temple
<i>unknown</i>	sailmaker			1654·3·2	Goshinji-temple
Hans van der Heyde				1656·8·26	"
Coninck Davit				1656·9·28	"
Wouter Cornelisz	assistant	Haarlem		1658·8·6	"
Frederik Fredericksz	sailor			1658·9·14	"
Howys Gillussen (?)				1658·9·24	"
<i>unknown</i>				1658·9·30	"
<i>unknown</i>				1658·10·5	"
Jan Heendertsz		Zeeriekzee		1658·10·8	"
St. François Reyniersen	merchant			1660·10·29	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1661·8·17	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1664·2·13	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1664·7·6	"
Reynier Adriaens	sailor	Amersfoort		1664·7·14	"
Jan Jans Graeff				1664·9·2	"
Peter Jansen de V ... (?)	master of sailing ship			1669·7·23	"
<i>unknown</i>	sailor			1670·7·18	"
<i>unknown</i>	sailor			1670·9·7	"
Cornelis Velthuys	upper-surgeon			1672·8·31	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Pieter Jansz van Gremingen	assistant anchorman & gunner			1672·10·3	"
Ysaack de Brauw	under-mer chant			1672·11·23	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1673·7·19	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1673·9·3	"
Jarigh Volgers	sailor			1673·9·7	"
Huybreght Ewonts	carpenter			1674·8·4	"
Cornelis Evertzen	carpenter			1674·8·16	"
Carsten Hoop	assistant anchorman & gunner			1674·8·31	"
Jan Cornelissen van Bahoesen	sailor			1674·9·12	"
Jan Michielsen	sailor			1674·9·14	"
Pieter Spanyaerd	sailor			1674·9·14	"
Adriaen Pietersen	sailor	Middelburgh		1674·9·30	"
Adrian Dircksen	sailor	Westvriessen		1674·10·12	"
Gerard Bengholt	under-mer chant			1676·6·23	"
David Hartman	assistant			1676·7·2	"
Hans Müller	sailor	Rostok		1676·7·30	"
Coenraat Famissen	assistant	Amsterdam		1676·8·20	"
Jeremias Steerlingh	assistant			1676·9·5	"
Hendrik Engelke	sailor	Hamburg		1676·9·6	"
Symon Cornelissen	gunner	Amsterdam		1676·10·21	"
Jacob Jansz	sailor	Amsterdam		1678·9·22	"
Christiaan Jose	sailor	Lubsigh		1678·10·3	"
Pieter Jansz Snoeckerancker	steward	Enckhuÿzen		1678·10·10	"
Stoffel Jansz Fichelaar	sailor	Rotterdam		1679·10·8	"
<i>unknown</i>	sailor			1680·9·8	"
Andries Hendricksz	sailor			1680·9·9	"
Marten Pietersz	boatswain	Franeker		1680·9·10	"
Philip Jansen Conÿn	carpenter	Rotterdam		1680·9·22	"
Jan Joosten	sailor	Ostende		1680·9·27	"
Symon Cornelisz Swart	sailor	Broeckermeer		1680·10·3	"
Joris Jansen	sailor	Funen		1680·10·6	"
Albert Willemsz	sailor	Dordrecht		1681·8·20	"
Pieter Princelant	sailor	Rotterdam		1681·9·8	"
Kaurens Jansz	sailor	Dordrecht		1681·10·27	"
<i>unknown</i>	sailor			1682·10·11	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
<i>unknown</i>	sailor			1682·10·12	"
Vos	assistant			1683·8·(?)	"
Besselman	senior merchant (?)			1683·8·26(?)	"
Johannes Besselman				1684·(?)·24	"
<i>unknown</i>	boatswain's mate			1684·9·9	"
Barent Obbessen	cooper	Amsterdam		1684·(?)·18	"
Laurens Pieters	watcher			1689·10·10	"
Jan Lievenss (?)		Haarlem		1689·10·17	"
Pieter van Dyck	merchant			1691·11·23	"
Wouter Sibens	store keeper			1693·8·9	"
Abert Brand	under-steersman			1693·8·15	"
Roelof Pietersz	sailor			1695·8·13	"
Dirk Voort	gunner			1695·8·27	"
Armertiers	sailor			1695·9·8	"
Jan Ynbberths (?)	under-steersman	Nieuuland		1697·10·13	"
Gerrit Hendrikse	cooper			1698·8·4	"
Dirk Pieterszen	gunner			1698·8·27	"
Gysbert Dekker	sailor			1698·8·28	"
Ybert Hiddes van Staveren	quarter-master			1698·8·30	"
Jan Michielsz	corporal			1698·9·12	"
Arent Cornelisz	gunner			1698·9·13	"
Pieter Jansz	gunner			1698·9·17	"
Laurens Pietersz	gunner			1698·9·28	"
Gysbert Janszen Enkhÿtzen	sailor			1699·5·23	"
Ysaak Penny	boy	Middelburg		1700·8·25	"
Jan Persoons	boy	Vlissingen		1700·8·25	"
Jan Mÿykens	book keeper			1700·10·28	"
Pawbertus		Haarlem		1701·8·11	"
Haarteus H···(?)		Rotterdam		1701·9·15	"
Pieter de Grood				1701·9·21	"
Trant Willems Suuit (?)				1702·9·10	"
Abraham van den Elard	assistant			1703·9·11	"
<i>unknown</i>	sailor			1703·9·16	"
Harm··· (?) Jansz	sailor in charge of cordage & cargo			1704·9·30	"
<i>Cornelis···(?)</i>	sailor			1704·10·1	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Jan Hamshooff				1705·9·29	"
<i>unknown</i>	senior-steersman			1705·10·5	"
Willem Anthows(?)	steward			1705·10·12	"
Pieter Theunisz				1706·8·16	"
Jan Scholten	surgeon			1706·8·18	"
Gerrit Roelofsn	sailor	Amsterdam		1707·9·10	"
Francisco Jansn	sailor	Banda		1707·9·10	"
Gerrit Arendsz	sailor			1708·8·4	"
Hendrik Gerritse	sailor			1708·9·16	"
Willem Gerritse Duys (?)	under-car-penter			1708·10·8	"
Hendrik Hendriksz	sailor			1708·10·8	"
<i>unknown</i>	sailor			1708·10·14	"
Gerrit Jansz	sailor	Amsterdam		1708·10·14	"
Steven van Geldorp	surgeon			1709·9·12	"
Pieter Wester		Amsterdam		1709·9·26	"
Hendrik Willmsz	sailor	Hulst		1709·10·11	"
Jan van Grauwenhaar	book keeper			1710·9·29	"
Barent Wÿn	assistant			1710·10·25	"
Harmanus ten Bosch	sailmaker			1711·1·1	"
Lourens Appelgroen	sailor	Hamburg		1711·9·22	"
Pieter van der kemp	steward	Rotterdam		1711·9·27	"
Jan Volkerss	sailmaker			1712·8·23	"
Jan Cornelisz Dullart	corporal	Rotterdam		1712·9·10	"
Cornelis de Haan	sailor			1712·10·9	"
Jan Heusler	bookkeeper			1713·8·14	"
Jonas Hulst	sailor	Stokholm		1713·8·19	"
<i>unknown</i>	sailor			1713·9·14	"
Lodewÿck Jansen	sailor	Hiesen Nieuwburg		1713·9·30	"
Jacob Schelling	sailor	Trincomale		1713·10·27	"
Jan van Heest	sailor	Leyden		1713·10·29	"
Jan Jochemszon	boatswain	Amsterdam		1713·10·31	"
Jan Pieterszon	sailor	Ditmarse		1714·10·25	"
Steven Hendricksz	sailor	Cmbden		1715·9·15	"
Jacob Dircksz de Harder	sailor			1715·9·18	"
Jan Blom	corporal			1715·9·19	"
Gillis(?) kuÿnen	sailor			1716·9·17	"
Pieter Cornelisz de Roos	sailor	Amsterdam		1716·10·20	"
Jan Willemsz	sailor	Amsterdam		1716·10·21	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Gelyñ (?) Freeke	sailor	Middelburg		1716•10•29	//
Hendrik de Vogel	under-sur- geon			1719•1•11	//
Hans Hanszn	sailor	Bellum		1719•1•20	//
Deuwe Pieterszn	sailor	Ameland		1719•10•17	//
<i>unknown</i>				1720•10•16	//
Jan Baddelman	sailor	Bremen		1721•9•17	//
Wessel Jansn	sailor	Amsterdam		1721•10•4	//
Jacobus Vabel (?)	sailor	Amsterdam		1721•10•9	//
Swerns (?) Jansz	gunner	Drilburg		1721•10•23	//
Jan Bal (?)	sailor	the Hague		1723•8•31	//
<i>unknown</i>		Java (?)		1724•10•4	//
Pieter Wo...(?)	sailor			1725•8•17	//
Jottis Bottis (?)	sailor			1725•8•19	//
Pieter Janst	sailor			1725•9•15	//
Pieter Brooswel	sailor	Amsterdam		1725•9•26	//
Albert Marteus	sailor			1725•10•10	//
Barent Audriesz	sailor			1726•9•21	//
Gerard van Aaken	under-mer- chant			1726•11•2 (?)	//
Hans Andriesz	sailor	Eyden		1727•8•4	//
Volkert Hendrik	sailor	Emden		1727•9•13	//
Philip Baltzer					
<i>unknown</i>	sailor			1728•7•26	//
Christiaan Jansz	sailor	Copenhagen		1729•9•20	//
Coert Christiaansz	sailor			1729•9•24	//
Willem Jansz van Swieten	senior-car- penter	Alpen		(?)	//
Johan Pieter Crudon	assistant			1730•8•19	//
Class Jansen Paap	gunner			1730•9•9	//
Dirk Boudewynse	sailor			1730•10•2	//
Jan Andriez	sailor			1730•10•7	//
Pasquier Niko	sailor			1730•10•9	//
Jan Roeloffze	sailor			1730•10•24	//
Pieter Janzen	sailor	Trooyburg		1731•8•28	//
Casper Janszen	sailor	Bremen		1731•9•4	//
Laurens Wÿnberg	sailor	Bremen		1731•10•15	//
Ary Boockesteÿn	assistant	Overschie		1732•6•5	//
Pieter van Dyk	sailor	Amsterdam		1732•7•25	//
Ysaack Pieterszen	sailor	Carelshaven		1732•8•6	//
Jan Jansz	sailor	Vuur		1732•8•16	//
Pieter Andriersz	sailor	Oppenrade		1732•8•19	//
Jan Pietersz	sailor	Elsenew		1732•8•20	//

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Cornelis van Overen	gunner	Hoorn		1732·9·3	"
Bastiaan Michielsz	sailor	Akersloot		1732·9·9	"
Dirk Bierman	sailor	Amsterdam		1732·9·12	"
Gerrit Fredrik Lutken	sailor	Meckelenburg		1732·9·19	"
Christiaan Cornelisz van Beek	sailor	Graawn		1732·9·21	"
Cornelis Jansz	sailor	Engelsholm		1732·9·23	"
Jan Jansz Boud	sailor	Amsterdam		1732·10·1	"
Jurrian Hendrikz	sailor	Emden		1732·10·14	"
Jacobus van den Heuvel	sailor	Berendregt		1732·11·2	"
Jan Hofsteeden	sailor	the Hague		1733·9·11	"
Jan Willem Visser	corporal	Helsen		1733·9·18	"
Tjenk Jurriaanzzen	sailor	Grunminger		1734·7·31	"
Dirk Ongerstejn	sailor	Oldenburg		1734·8·2	"
Jan Lammertsz	sailor	Elst		1734·8·5	"
Class Jansz	sailor	Alkmaar		1734·8·13	"
Hendrik Helmers	corporal	Bronsvoyk		1734·8·15	"
Jan Thomas Tielman	sailor	Carelscoon		1734·8·22	"
Pieter Rudolph Tredel	sailor	Hassemer		1734·8·24	"
Karman Overbeek	trumpeter	Hamburg		1734·9·2	"
Sybrand Christiaansz	sailor	Alphen		1734·9·9	"
David Tompson	sailor	Rotterdam		1734·9·18	"
Pieter Koetestreek	sailor	Rotterdam		1734·9·18	"
Claas Suurveld	sailor	Amsterdam		1834·9·20	"
Willem de Swart	sailor	Bremen		1734·9·21	"
Engelbert van Ciesel (?)	sailor	Harderwyk		1734·9·22	"
Andries Valk	sailor	Bergen		1734·9·23	"
George Frederik Bergholst	assisant			1734·10·14	"
Hermanuss Justus	sailor			1736·9·9	"
Willem de Groot	sailor	Delft		1736·9·10	"
Abbekerk Gerrit	merchant			1736·9·15	"
<i>unknown</i>	sailor			1736·10·30	"
Ysaak de Valk	master of sailing ship			1737·8·10	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1737·8·19	"
Reaal Arenas	sailor	Langesond		1737·8·27	"
Hendrik Warrink	sailor			1737·9·20	"
Sacharas Volbregt	sailor			1737·10·1	"
<i>unknown</i>	sailor (?)			1737·10·14	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
(?)	sailor			1737·10·20	"
Harmanus Boone	assistant			1737·10·24	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1738·1·2	"
Willem de Pyp	sailor			1738·10·12	"
<i>unknown</i>	sailor			1738·11·3	"
<i>unknown</i>	sailor			1738·11·4	"
Claas Jansz Domine	sailor			1739·7·30	"
Jan Steynier	trumpeter	Koningsbergen		1739·8·5	"
Christiaan Scherps- ing	sailor	Kasteleyn		1739·8·7	"
Jan de Koster	sailor	Ghent		1739·8·8	"
Benjamin de Grooyer	sailor	Amsterdam		1739·8·22	"
Leendert Syfkers	gunner	Zierikzee		1739·9·7	"
Cornelis de Vries	sailor			1739·9·11	"
Cornelis Andriesz	sailor			1739·9·14	"
Hendrik Haak	sailor			1739·9·15	"
Servaas Schaf	under-mer- chant	the Hague		1739·9·21	"
Jan Manswelks	sailor			1739·9·24	"
Marten Engdsz	sailor			1739·9·27	"
Andries Joseph Brunauw	sailor			1739·10·1	"
Thomas Pietersz	sailor			1739·10·2	"
<i>unknown</i>	sailor			1739·10·5	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1740·6·6	"
Hans Carster	sailor			1740·8·24	"
Gerrit Branden	sailor			1740·10·30	"
Dirk Kuyper	steward	Hoorn		1741·9·13	"
Mareus Pieterss	sailor			1742·8·19	"
Jan Evertss	sailor			1742·8·23	"
Pieter Berkhout Welkers	sailor			1742·9·7	"
Hendrik Vroom	sailor			1742·9·9	"
Gerrit Janss de Vries	sailor			1742·9·22	"
Jochem Pieterss Spade	sailor			1742·9·27	"
<i>unknown</i>	sailor			1742·10·24	"
Reynier Holck	sailor	Steur		1743·10·15	"
Jochem Doedel	sailor			1743·11·11	"
Jacobus van Heem- stede	head-cooper			1744·8·11	"
Claas Meyer	sailor	Delft (?)		1744·8·20	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Hendrik Kopers- lager	sailor	Bremen		1744·9·26	"
Jan Paulus Holst	sailor	Flensburg		1744·10·19	"
Martin Stargart	assistant			1744·11·7	"
Jacob Roosendaal	sailor	Leyden		1745·7·30	"
Gerrit Stoevenryk	steward			1745·8·26	"
Jan Laurens Schorff	drummer			1745·9·2	"
Pieter van Ryswyk	sailor			1745·9·27	"
Adriaan Johannis(?)	gunner			1745·10·1	"
Pieter van Dussen	sailor	Leyden		1745·11·3	"
Jacob van Kuyk- horenen	assistant			1745·11·25	"
Cornelis Petier	sailor			1745·11·27	"
Jan Jochem Ludeman	sailor	Hamburg		1746·8·28	"
Jacobus Hartswig	sailor	Amsterdam		1746·8·31	"
Jan van Assen	unders-steers sman	Amsterdam		1746·9·1	"
Johannes Jacobs	under-car- penter	Wercum		1746·9·24	"
Marinus Aremans	sailor	Goes		1746·10·19	"
Lambert Weese- laar	sailor			1746·11·8	"
Jacob Ricard	book keep- er			1747·7·5	"
Jan Pyl	master of sailing ship	Amsterdam		1747·8·22	"
Hendrik Coubelszn	sailor			1747·9·1	"
Jan Abraham Sebol	sailor	Hoorn		1747·9·9	"
Sweerus Barends	sailor			1747·9·24	"
Hendrik Mom··(?)	quarter- master			1747·9·27	"
<i>unknown</i>	sailor			1749·(?)·21	"
Christiaan Karstens	sailor			1750·9·17	"
<i>unknown</i>	sailor			1750·11·2	"
Bastiaen Reese	sailor	Genua		1751·9·6	"
Jacob Roege	sailor	Straalzond		1751·9·24	"
Willem Sammbery	sailor			1751·10·5	"
David Somer	sailor			1751·12·7	"
Reynier Willem de Vos	assistant			1752·9·4	"
Volkert Nanning	sailor			1752·11·7	"
Jan Kist	sailor	Medemblik		1752·11·23	"
Pieter Krÿnen	boatswain			1753·8·5	"
Cornelis Brommene	sailor	Vlissingen		1753·8·7	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Jan Godfried Wegenaar	sailor			1753·9·6	"
Hermanus Geersen	sailor			1753·10·2	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1754·1·19	"
Wynand van Hiddeldyk	sailor	Schiedam		1754·9·3	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1754·10·1	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1754·1·19	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1754·10·1	"
Willem Hottil	sailor			1754·10·8	"
Frans van den Broek	sailor	Amsterdam		1754·10·14	"
Johan Casper Theyer	sailor	Wissenaar		1755·8·25	"
Booy Hanren (?)	sailor	Frensburg		1755·9·10	"
Jan Verwer	sailor	Alkmaar		1755·10·6	"
Jan Frederik Bartels	assistant			1755·10·29	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1755·12·11	"
Christiaan Hevers (?)	sailor			1756·8·28	"
Pieter Kinderdyk	sailor	Heurs		1756·8·30	"
Pieter Schute (?)	sailor			1756·9·18	"
Harmanus Harmeus	sailor	Middelburg		1756·9·24	"
Jan van Elst	sailor	Griethuisen		1757·9·3	"
Johan Hendrik Rietveld	sailor			1757·9·6	"
Siveris (?) Oberg	sailor	Karelsbroon		1757·9·10	"
Otto	sailor	Amsterdam		1758·8·23	"
<i>unknown</i>	sailor			1759·12·1	"
(?)	slave	Baly		1760·1·29	"
Hermanus de Vry				(?)	
Teunis Teunisse	sailor	Trikkefoor (?)		1760·10·19	"
Jacob Stohman	sailor	Danzsig		1760·10·27	"
<i>unknown</i>	sailor			1760·10·31	"
Dirks	sailor			1760·11·15	"
<i>unknown</i>	sailor			1760·11·21	"
Tillis Kok	sailor	Dordrecht		1761·9·29	"
Trans Jansz Korbeek	sailor	Dirkland		1761·10·4	"
Dominicus Soljen	sailor	Lisbon		1762·9·14	"
Jan Jonsetle de Groot	sailor			1762·9·19	"
Gerrardus van Aken	assistant	Rotterdam		1762·11·13	"
Jan Willem Gros (?)	sailor	Danzsig		1762·11·25	"
Johannes Quist	sailor	Nieuwrosmaar		1762·11·25	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Adries de Bruyn	under-steersman	Amsterdam		1763·8·4	"
Willem de Groot	sailor	Amsterdam		1765·8·12	"
Jan Jonsz Bol	sailor	Wyk		1765·8·26	"
Pieter Allemans	sailor	Maastricht		1765·9·16	"
Johan Christiaan Elias Gister	sailor	Overwittesteede		1765·10·13	"
Elke Rynders	sailor	Groeningen		1765·10·18	"
Christiaan Krul	under-steersman			1765·10·19	"
Pieter Laurens	sailor	Gordyk		1766·9·24	"
Dirk Croesman	sailor	Amsterdam		1766·10·18	"
Jacob Hillebrand	quarter-master	Harderwyk		1766·10·25	"
Jan Mossel	sailor	Bremen		1767·9·3	"
Barend van Bemelen	sailor	Amsterdam		1767·10·14	"
Barend van Melsen	sailor	Middelburg		1767·10·29	"
Jan Frederik Walder	corporal	Strasburg		1767·12·22	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1767·12·22	"
Jan François de Haut	surgeon	Aarlon		1768·5·17	Tōyōin-temple
Jan Bert	sailor	Danzsig		1769·8·14	Goshinji-temple
Wiggert Janssen	sailor	Leuwaarden		1769·8·31	"
Adrianus Jansen	sailor	Zirkzee		1769·9·7	"
Johannes Jacobsz	sailor	Ansbag		1769·9·8	"
Johannes Cornelisse Gorg (?)	sailor	Hamburg		1769·9·20	"
Jan Eckhart	sailor	New York		1769·10·13	"
Andries Hartman	sailor	Amsterdam		1769·10·28	"
Jurgen Holm	sailor	Stockholm		1769·11·11	"
Dirk Graauw	carpenter	Scherringhousen		1770·2·9	"
Adolph Wentsel	sailor	Ruysmund		1770·9·14	"
Ysaac de Kasser	sailor	Liverno		1771·10·11	"
Richard Pype	sailor	Rotterdam		1771·10·21	"
Cornelis Hansen	sailor	Christianssand		1772·9·3	"
Godfried Temeld	cook	Nimps		1772·10·24	"
Carel Frederik Onland	sailor	Leveren		1772·10·25	"
Charles	slave	Cormandel		1773·6·21	"
<i>unknown</i>	slave			1774·7·5	"
Jan Traanberg	sailor	Stockholm		1774·8·10	"
Casper Vink	corporal	Eversberg		1774·8·14	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Claas Teuntje	sailor	Hamburg		1774·8·23	"
Joseph Schrewden	sailor	Gryn		1774·9·7	"
Laurens Coert Brandse	sailor	Christiania		1774·9·8	"
Johan Herman Groot	assistant cook	Stockholm		1774·9·15	"
Willem Schröder	sailor	Rotterdam		1774·9·21	"
Adriaan Johan Wannemaker	assistant			1774·10·22	"
Lubke Sjoers	sailor	Oukerk		(?)	"
Cornelis Duÿndom	sailor	Wassenaar		1774·10·27	"
Johannes Rowe	sailor	Sluÿsgelasten		1774·11·2	"
Claas Pietersz	sailor	Malgrurin		1774·11·2	"
Augustinus de Lik	sailor	Genua		1774·11·3	"
Pieter Asschhoff	gunner	Byp		1774·11·7	"
Michiel Kok	cooper	Leyden		1774·11·9	"
Jan Adriaan Beck	book keeper			1774·11·15	"
Dirk Hendrik·(?)	sailor	Bremerlel		1775·7·10	"
Jan Pietersen	sailor	Copenhagen		1775·7·31	"
Christiaan Thomassen	sailor	Amond		1775·9·12	"
Huybert Felise	sailmaker	Delft		1775·10·2	"
Willem Garner	boatswain	Amsterdam		1775·10·4	"
Cornelis Gillis van Veltom	assistant anchorman & gunner	Vlissingen		1775·10·12	"
Jurgen Gluffgave	sailor	Ampssegt		1775·10·15	"
Jean Baptist Scholist	sailor	Antwerpen		1775·10·16	"
Thennis (?) Barend Winter	sailmaker	Zogendaal		1776·8·8	"
A. Willems	sailor	Groningen		1776·8·12	"
Christiaan Pieter Brett	boatswain			1776·8·20	"
Joseph Frederik Hek	smith	Stogart		1776·8·21	"
Robbert Sjoerts (?)	sailor	London		1776·9·1	"
Jan Vaale	sailor in charge of cordage & cargo	Bremen		1776·9·3	"
Andries Severien Quist	steersman	Copenhagen		1776·9·23	"
Sybrand de Roode	sailor	Amsterdam		1776·10·5	"
Jan Coerssen	sailor	Oldenburg		1776·10·7	"
Hermanus Mulder	sailor	Düsseldorf		1776·10·20	"
Christiaan Basse	sailor	Muyden		1776·11·30	"
Johan Haaff	sailor	Rotterdam		1777·8·14	"
				1777·8·15	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Gerrit de Wilde	sailor	Amsterdam		1777-8-27	"
Carel Smith	sailor	Postlien		1777-8-27	"
A·E· Jan Schuts	under-mer- chant			1777-10-24	"
Jan Christiaan Stedenburg	sailor	Amsterdam		1777-11-2	"
Jan Cornelis Witte	assistant anchorman & gunner	Buyksloot		1777-11-14	"
Thomas Neegers	senior-sur- geon			1778-1-27	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1778-7-5	"
Jacobus van der Post	assistant steward	Delft		1778-9-9	"
Adriaan Melchior	sailor	Utrecht		1778-9-14	"
Jan Dirk	sailor	Danzsig		1778-9-14	"
Jan Nicolaas Wit	sailor	Badok		1778-9-18	"
Johan Jochem Kok	sailor	Straalsond		1778-10-8	"
Gerrit Gaalkop	sailor	Utrecht		1778-11-5	"
Jacobus du Mon (?)	sailmaker	Middelburg		1778-11-8	"
Herman Jansz Walraven	sailor	Liem		1779-4-16	"
Antony di Pang	sailor			1779-8-20	"
Johan Godfried Raaf	sailor	Danzsig		1779-9-5	"
Trans Frederik Foel	smith	Nieuwediep		1779-9-7	"
Nelis (?) Murze (?)	sailor	Dortheim		1779-9-9	"
Joh : Fried : Geelman	carpenter			1779-9-22	"
Johan Levien	sailor	Harlingen		1779-10-3	"
Cornelis Dirkse	sailor	Amsterdam		1779-10-26	"
Willem Bensing	sailor	Gottenberg		1779-11-17	"
Jansen Busschede (?)	sailor	Amsterdam		1779-11-21	"
<i>unknown</i>	sailor			1779-12-5	"
Arien Witteblink	steersman			1780-8-11	"
Frans de Vos	sailor	Swol		1780-8-27	"
Ammelutjes	carpenter	Lemme		1780-8-30	"
Ysaac Lecu	cooper	Amsterdam		1780-9-2	"
Cornelis Vaarding	assistant cook	Berkel		1780-9-2	"
Augustus Anthony Reemer	sailor	Stade		1780-9-6	"
Gerrit Gerritse	sailor	Bikbergen		1780-9-18	"
Evert Swen	sailor	Norway		1780-10-2	"
Barend Frieberg	sailor	Wesel		1780-11-7	"
Johannes Manhout	sailor	Gent		1780-11-11	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Otto Dries	sailor	Strenwel		1780•11•18	"
Nicolaas Andreas Helt	sergeant			1780•11•29	"
Abraham Willem Alvis	clerk			1781•8•7 (?)	"
Pieter Knaap	cooper	Amsterdam		1781•9•19	"
Pieter Simberg (?)	sailor	Carelshaven		1781•10•3	"
Jan Sybrandse	carpenter	Dordrecht		1781•11•1	"
Jacob Switsen	sailor	Zurg		1781•11•27	"
Ernst Rudolph	book keeper	Hessen		1782•11•30	"
Christiaan von Beckstein				(?)	
Michiel Schouwer	senior-steersman			1783•9•4	"
Frederik Rudolf Olshof	sailor			1783•9•27 (?)	"
Lyn Edele	sailor			1783•10•6	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1783•12•29	"
Ohrispyn	boy			1784•1•11	"
Christoffel Weisgerber	sailor			1784•8•20	"
Gerrit Vrits	sailor			1784•9•12	"
Reynier Molle	surgeon 3 rd class	Gouda		1785•1•26	"
Johan Jacob Brann	corporal	Mitlingen		1785•1•28	"
Hendrik Duyversteyn	cook	Thoolen		1785•10•16	"
Laurens Laukhorst (?)	assistant	Campen		1785•12•26	"
Jan Bouwmeester	cooper	Amsterdam		1786•8•24	"
Jan Willem Pot	sailor	Nukerken		1786•8•26	"
Christiaan Hendrik Scbalthooren	sailor	Raders		1786•8•26	"
Cornelis Madern	senior-surgeon	Rotterdam		1786•9•6	"
Jan Buys	sailor	Purmerend		1786•9•12	"
Jan Fanvarcq van den Briel	assistant			1786•9•14	"
Tobias Oldendick	sailor	Dirklagen		1786•10•1	"
Herman Mourik	sailor	Belsebel		1786•10•5	"
Teebeek (?)					
Jan Simon van der Linden	sailor	Amsterdam		1786•10•22	"
Claas Munster	sailor	Helmhorn		1786•11•9	"
Gerrit Viesel	surgeon 3 rd class	Rotterdam		1787•1•21	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Jan (...) hun Christiaan	Cadet	Vlissingen		1787-1-29	"
Claas Beuseman	sailor	Visner		1787-9-9	"
Hans Theunis	sailor	Egerson		1787-9-10	"
Frederik August Lemke	sailor	Ridderhoren		1787-9-19	"
Thomas Flos (?)	sailor	Middelburg		1787-9-28	"
Frederik Slegting	sailor	Hanover		1787-10-6	"
Jan Goeree	sailor	Leyden		1787-10-6	"
Hendrik Josephus de Provoost	sailor	Ostend		1787-10-8	"
Joseph Le Roy (?)	steward	Amsterdam		1787-10-12	"
Anthony Beyer	boatswain	Bremen		1787-10-15	"
Thomas van Triet	captain	Rotterdam		1787-10-16	"
Hendrik Versluys	boatswain	Gouda		1787-10-18	"
Jan Surith (?)	carpenter	Heusburg		1787-10-22	"
Jan Philip Muller	sailor	Verteveld		1787-10-26	"
Jan Jansen	sailor	Fleusburg		1787-11-3	"
Pieter Jacobs	sailor	Veuren (?)		1787-11-10	"
Hendrik van der Cist	sailor	the Hague		1788-8-16	"
Carel Naaytums	quarter-master	Ghent		1788-8-25	"
Juriaan Hause	sailor	Copenhagen		1788-8-28	"
Arie Joseph de Jong	sailor	wilze		1788-8-28	"
Willem Heyns	sailor	Elkenhenden		1788-8-31	"
Jacob Laurens	sailor	Denmark		1788-9-6	"
Jan Fredrik kielman	cook	Mergenfeld		1788-9-7	"
Philip Hoethuysen	sailor	Elbeveld		1788-9-10	"
Coenraad Hendrik Kippelaar	sailor	Hildenheym		1788-9-10	"
Rens Pieter Blauwboer	carpenter	Sardam		1788-9-27	"
Jan Smith	sailor			1788-10-6	"
Jacobus Sammeling	sailor	Leyden		1788-10-13	"
Hendrik Bromerls	sailor	Amthaage		1788-10-14	"
Johan Jacob Rewont	sailor	Hamburg		1788-10-15	"
Freur Harlebeeven	sailor	Carelsland		1788-10-19	"
Jan Miggiel Acker	sailor	Maastricht		1788-10-25	"
Pieter knobardt	sailor	Lobiet		1788-10-27	"
Claas Sybrand	sailor	Zeeland		1788-10-31	"
Johan Godlib Schadeuwits	sailor	Leipzig		1788-11-4	"
Jan Hendrik Geley (?)	sailor	Oldenburg		1789-8-10	"
Claas Lendhuysen	sailor	Amsterdam		1789-8-20	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Albert Willems	sailor	Amsterdam		1789•8•21	"
Pieter Albert de Graaff	sailor	Buyksloot		1789•8•30	"
Ernst Eden	sailor	Straatsen		1789•9•2	"
Christoffel Christiaan Stens	sailor	Capetown		1789•9•8	"
Jan Jacob Haaneman	sailor	Oldenburg		1789•9•15	"
Joseph Schenme	sailor	Marseilles		1789•9•15	"
Michiel Andriesen	sailor	Dronthem		1789•10•6	"
Godfried Hofman	sailor	Byleveld		1789•10•12	"
Cornelis Seymons	sailor	Ekmond		1789•10•28	"
Gerrit Snoek	sailor	Haalem		1789•11•1	"
Gysbert Mittrop	sailor	Haalem		1789•11•3	"
Joseph van Lingen	sailor	Leeuwarden		1789•11•15	"
Gellis Versteyn	sailor	Amsterdam		1789•11•20	"
P•H•Broekman	sailor	Vlissingen		1790•10•4	"
Christoffel Roelofs	sailor	Dronebergen (?)		1790•11•6	"
Erik Nieulsoom	sailor	Gemencar-te (?)		1790•11•9	"
Pieter Bergreen	assistant anchorman & gunner	Stockholm		1792•9•18	"
Claas Christiaanse	quarter-master	Westernaarde		1792•9•21	"
Willem Vroom	carpenter	Arim		1792•11•1	"
Jan Coersen (?)	sailor	Amersfoort		(?)	"
Gysbert Hemmy	chief of Dutch Factory	Capetown		1798•6•8	Tennenji-temple
<i>unknown</i>	slave			1805•5•1	Goshinji-temple
<i>unknown</i>	slave	Java (?)		1806•8•26	"
<i>unknown</i>	sailor			1807•7•23	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1809•9•22	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1809•11•15	"
<i>unknown</i>	slave	Java		1809•11•25	"
<i>unknown</i>	cooper			1813•7•21	"
<i>unknown</i>	sailor(?)			1813•11•13	"
Jan Fredrik Feeilke	surgeon	Hoorn		1814•7•28	"
<i>unknown</i>	sailor			1814•9•26	"
Harmanes Smit	1st clerk	Amsterdam (?)		1821•8•14	"
Pieter. M. Veeris	official			1822•10•12	"
<i>unknown</i>	sailor(?)			1823•5•18	"
Doeff Sjokits	son of H. Doeff	Nagasaki		1824•2•18	"
Jan van den Berg	sailor	Amsterdam		1825•12•15	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
<i>unknown</i>	sailor			1825·12·18	"
N··(?) Schröter	carpenter			1826·10·11	"
Willem Jansen	probation er sailor	Amstrdam		1827·8·5	"
Kornelis Hanenpcot	sailor	Groningen		1827·9·6	"
Christiaan Oeymans	boatswain	Emden		1828·9·13 (?)	"
J. M. Zoetermeer	senior- steersman			1844·8·21	"
<i>unknown</i>	upper- steersman			1844·9·(?)	"
C. J. Roetteken	officer			1844·10·27	"
<i>unknown</i>	sailor			1844·9·2	"
F. C. Lucas	assistant 2 nd class	Rotterdam	1817·10·25	1852·10·11	"
Sijmen Schipper	engineer 1 st class			1855·8·2	"
Jacod de Boom	sailor 2 nd class			1855·8·4	"
Pataas	stoker	Java (?)		1855·9·7	"
Hendrik de wijn	chief pilot	Texel		1857·1·8	"
M. J. H. Dadelcr	sailor 1 st class	Grieswalden	1818·6·21	1857·12·6	"
J. Stekelenburg	sailor 1 st class	Noordorp	1822·7·19	1857·12·12	"
Anna Maria Fis- cher		Amsterdam	1836·4·7	1858·8·8	"
Halver Oelsen	Sailor			1860 (?)	Yokohama
Enma J. verbeck			1860·1·26	1860·2·2	Goshiji- temple
Nanning Dekker	captain			1860·2·26	Yokohama
Wessel de Vos	captain			1860·2·26	"
Henricus Coenra- dus Yoannes Heus- ken	interpreter US Legation	Amsterdam	1832·1·20	1861·1·15	Kōrinji- temple
N. G. Sieburgh	officer	Amsterdam	1827·10·18	1862·6·27	Goshinji- temple
J. P. Cuycr			1833·10·6	1862·6·7	"
Philippus Braacx	sailor 3 rd class	Rotterdam	1841·12·2	1864·4·9	"
J. P. Carst	merchant			1866	Yokohama
T. J. J. van de Pol- der				1867	"
Barthelmeus Sin- deren	student interpreter French consulate			1868·5·13	Goshinji- temple
Dorotheer Acatha Schiff				1869·4·2	Urakami

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
C. F. E. V. Barden- dierk				1869	Yokohama
Jacob van Zameren				1869•2•21	Goshinji- temple
Hermine Marie Boulet		Amsterdam		1870•1•22	Yokohama
James Rhyndoud		Zeeland	1816 (?)	1870•1•24	"
H. M. B. Carst				1870	Yokohama
B. Dereiger				1872	"
W. A. Toewater				1872	"
Henderik Johannes Frey			1830	1872•2•2	Shuhoga- hara
J. J. Worek	captain			1873•1•5	"
A. M. J. Benkema				1874	Yokohama
Eleazar Maricus de Rijke				1875•8•11	Shuhoga- hara
M. O. Geerts				1876	Yokohama
E. Holterman				1876	"
E. J. Wolters				1877•1	Urakami
J. H. Boulet				1877	Yokohama
J. Vroom				1878	Yokohama
Maria Scheerboom Frey			1835	1879•3•11	Shuhoga- hara
Elsje Maria Jannet- je Hassoldt			1851	1879•10•8	"
J. J. van Gendt				1880	Yokohama
Johanna Maria Alida Hassoldt				1881•6•8	Shuhoga- hara
J. W. Ekstrand				1882	Yokohama
A. J. C. Geerts		Oudendijk	1843•3•24	1883•8•30	"
C. Fock	doctor			1883•2•4	Urakami
Crandus van der Vlies				1885	Urakami
J. W. Ekstrand				1885	Yokohama
Gerrit Battekeij				1886•3•17	Urakami
W. C. van Oadt (?)				1887	Yokohama
T. van der Heyden				1887	"
P. J. C. Frank				1890	"
G. P. G. A. Scherer				1893•6•6	"
Ever Bongor			1842•9•9	1893•11•5	Shuhoga- hara
De Wringer				1893	Yokohama
J. P. van Hemert				1894	"
M. J. B. Noordhoek Hegt				1894	"

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
P. M. Carst				1895	"
E. ter Braake				1895	"
Wiggert Casper Bonger			1838·7·1	1895·11·17	Shuhoga- hara
T. A. Ekstrand				1896·3·23	"
M. P. R. Carst				1902	Yokohama
H. Noordhoek Hegt				1907	"
Guido Fridolin Ver- beek			1840	1911	Aoyama
J. W. Ekstrand				1912	Yokohama
Paul Adrtoan Jorles			1868·4·10	1914·11·11	Shuhoga- hara
Ludowicus storne- brink				1917	Yokohama
Frederik Klingen			1867·9·13	1917·9·3	Shuhogā hara
G. W. Paalman	Wireless operator			1917·11·21	Urakami
Gertrude Storne- brink				1918	Yokohama
Isaac Alfred Ailion			1848·3·9	1918·1·13	Shuhogara
Ferdinand plate				1919·10·10	"
Hobert Marie La Chapelle			1855·7·27	1919·12·12	Urakami
J. Reijkers				1920	Yokohama
George William van Rooغن			1920·5·25	1920·9·22	Shuhoga- hara
H. A. Scheuten				1922	Yokohama
L. J. A. van de Pol- der				1923	Yokohama
A. I. van de Polder				1923	Yokohama
Oreste Dusseldorp	teacher	Amsterdam		1924·7·31	Urakami
David Ailion			1880·1·22	1925·1·31	Shuhoga- hara
Jan Carst				1925·2·16	Yokohama
O. Marianne Hegt				1926	"
Charles Emile de Lerens			1866·11·4	1926·5·21	Shuhoga- hara
Jacobus Marinus Gosille			1897·7·24	1927·1·7	"
F. A. A. Kofod	captain			1931·6·19	Urakami
Pieter Goudswaard		Hillegersberg	1868·10·20	1932·2·12	"
Kiwa Geerts				1934	Yokohama
Kiyo de Eerens				1934·1·15	Shuhoga- hara

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Gerrit Arend Gasille			1913·3·11	1934·2·7	"
C. F. Bille		Amsterdam	1867·10·7	1934·10·4	Urakami
Johannes Anders van Doorn			1874·5·8	1936·1·19	Shuhogahara
Johannes Marks			1894·4·1	1937·1·13	"
Marie Anne de Voogd			1937·2·2	1937·2·9	"
Ito Gasille			1871·9·9	1939·6·16	"
Gerald Randolph Speelman			1938·3·18	1939·7·19	"
Juliana A. Benecke			1934·5·6	1940·10·8	"
Gerzon Nussbaun			1940·10·21	1940·10·26	"
Louis Sto(?)Rene brink			1887·9·17	1940·10·31	"
Johanna van der Pot			1876·2·13	1944·8·27	"
G. Couperus				1944	Yokohama
Tanve Ailion			1862·6·5	1945·6·30	Shuhogahara
Peter Gosille			1871·8·14	1946·2·4	"
Sachiko Plate			1870·9·19	1951·2·17	"
S. Wiersum				1951	Yokohama
<i>unknown</i>			1952·7·22	1952·7·22	Shuhogahara
Henriette Maria Verheijen			1952·12·15	1952·12·16	"
Henrietta Ailion			1952·5·14	1953·2·2	"
J. van Zeggelaar				1953	Yokohama
Ons (?)Liefste Benneke			1953·4·14	1953·4·14	Shuhogahara
Jozef Ackermans			1917·6·17	1953·5·12	"
Ireentiji M. Schroder			1953·12·29	1953·12·30	"
Walter Rutte			1954·9·11	1954·9·11	"
Ferdinand Ailion			1888·9·22	1955·2·2	"
Dirk Jorritsma			1928·10·20	1955·11·20	"
Wilhelmina Ailion			1884·12·13	1956·8·24	"
Johannes Franciscus van Meyhof			1904·4·27	1958·2·4	"
Gerardus Hendriks van Meer			1875·5·1	1959·4·25	"
Peter de Vries			1885·8·2	1959·4·25	"
Willem Herrebrugh			1959·8·20	1959·8·20	"
Menno Simon Wiersum				1960	Yokohama

name	title	birth place	date of birth	year of death	burial place
Hendrick Der- aadf (?)				1962	"
Johanna C. Carst				1964	"
Agnes van der Elst				1964	"
Kisu de Vlies			1890·10·4	1964·5·12	Shuhoga- hara
Cornelis Philippus Vuyk			1889·6·21	1968·2·10	"
Charlie Ailion			1896·8·25	1969·4·9	"
Mathilda Storne- brink			1890·11·27	1976·5·23	"
Mabel Ailion			1894·7·16	1982·10·24	"
Drummond			(?)	(?)	Yokohama